

野田市東金野井貝塚発掘調査報告書

平成5年度

財団法人 千葉県文化財センター

野田市東金野井貝塚発掘調査報告書

平成5年度

財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県内には、2万5千か所にのぼる多数の遺跡が所在しており、その中で縄文時代の「タイムカプセル」とも呼ばれている貝塚は647か所確認されています。これらの貝塚は、当時の人々の生活したようすがよく残され、私たちに多くの感動を与えていますが、一部の有名な貝塚を除いては、そのようすが明らかにされている例はまだまだ少ないといえます。

また、首都圏に位置する本県では、近年めざましい開発に伴い、土地のようすが大きく変わり、貝塚、古墳などの埋蔵文化財の保存にも大きな影響を及ぼしています。

このため、千葉県教育委員会では、昭和63年度から国の補助金を得て、「重要遺跡発掘調査」の一つとして県内に所在する貴重な貝塚のうち、とくに開発等の影響をうけるおそれのあるものについて、今後の保護・活用のための基礎資料を得ることを目的に、測量及び確認調査を実施してきました。

今年度は、東葛地区に現存する貝塚の中で有数の大きさをもつ野田市東金野井貝塚の調査を、財団法人千葉県文化財センターに委託して実施しました。その結果、いままで知られていた馬蹄形の貝層分布範囲がさらに広がることが確認されたとともに、縄文時代前期から晩期にわたる長い期間に及んで人々が集落をつくって生活していたことが明らかになりました。

このように、今回は小さな面積の調査ではありましたが、これまでわからなかった貝層の分布範囲や形成されていたようすなど、貝塚の全体像の理解に予想以上の成果を得ることができました。

このたび、この成果を報告書として刊行することになりましたが、本書が学術資料だけではなく、文化財保護のために、広く一般県民の方々にも活用されることを願っております。最後になりますが、文化庁をはじめ、地元の野田市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者をはじめとする地元の皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

千葉県教育庁生涯学習部
文化課長 森 成 吉

例 言

1. 本書は、千葉県野田市東金野井字白幡593他に所在する東金野井貝塚（遺跡コード208-002）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚発掘調査の第6年次にあたるもので、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 発掘調査は、平成5年10月1日から同年10月27日まで実施した。
4. 整理作業および報告書作成は、平成5年10月28日から同年12月28日まで実施した。
5. 調査および整理・報告書作成は、調査研究部長 高木博彦、事業課長 西山太郎、印西調査事務所長 田坂 浩の指導のもとに、技師 安井健一が担当した。
6. 本書に使用した地形図および空中写真は、以下の通りである。
 - 第1図 国土地理院発行の1：50,000地形図 野田（NI-54-25-1）と水海道（NJ-54-30-4）を合成して使用。
 - 第28図 野田市発行の1：2,500地形図 野田市基本図6（IX-KD 09-2）を1：5,000に縮尺して使用。
 - 図版1 京葉測量株式会社による昭和62年撮影の空中写真（コース番号 C1-12、縮尺1：13,000）を1：5,000に縮尺して使用。
7. 本書に使用した方位は、座標北を示すものである。
8. 調査の実施にあたっては、飯塚博和氏をはじめとする野田市教育委員会の関係各位、地権者遠藤宗治郎、遠藤英一、遠藤泰雄、山崎武夫の各氏をはじめとする地元の皆様から多大なる御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第です。
9. 現地調査から報告書執筆にいたるまで、下記の諸氏から多くの御協力または御指導をいただいた。特に脊椎動物の鑑定には、千葉県立中央博物館 小宮 孟氏、遺物写真の撮影については、堀越知道氏の協力を得た。各々記して感謝の意を表する次第です。

阿部明義、岩城克洋、小宮 孟、堀越知道

目 次

本文目次

序 文

例 言

I はじめに	2
1. 遺跡の立地と環境	2
2. 周辺の遺跡	2
3. 研究略史	3
II 調査経過	5
1. 調査方法	5
2. 調査の経過	5
3. 土層説明	6
4. 各トレンチの状況	7
III 出土遺物	14
1. 土器	14
2. 土製品・骨角器	34
3. 石器	36
4. 動物遺存体	39
5. 貝サンプル	40
IV まとめ	45
1. 貝層の分布および形成時期について	45
2. 遺跡の形成と変遷について	46
3. おわりに	47

表 目 次

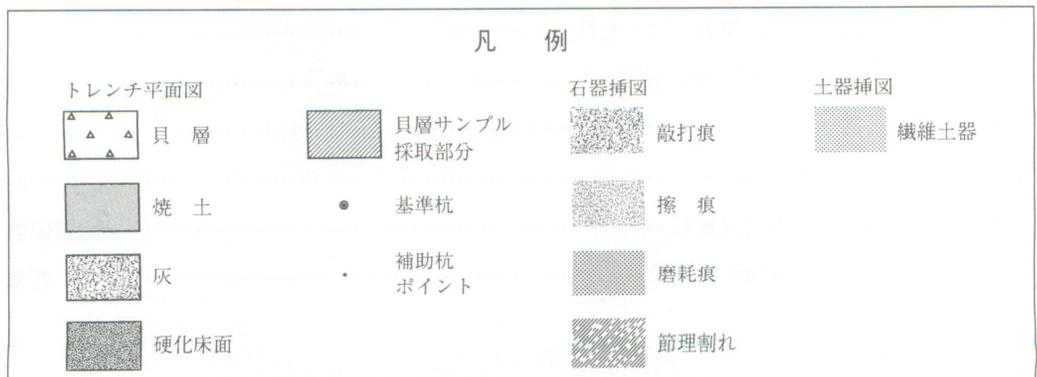
表1 トレンチ杭座標値一覧	5	表6 貝サンプル一覧	41
表2 土製品属性表	35	表7 貝類組成比率・計測値分布(1)	42
表3 骨角器属性表	35	表8 貝類組成比率・計測値分布(2)	43
表4 石器属性表	36	表9 貝類組成比率・計測値分布(3)	44
表5 動物遺存体種名一覧	39		

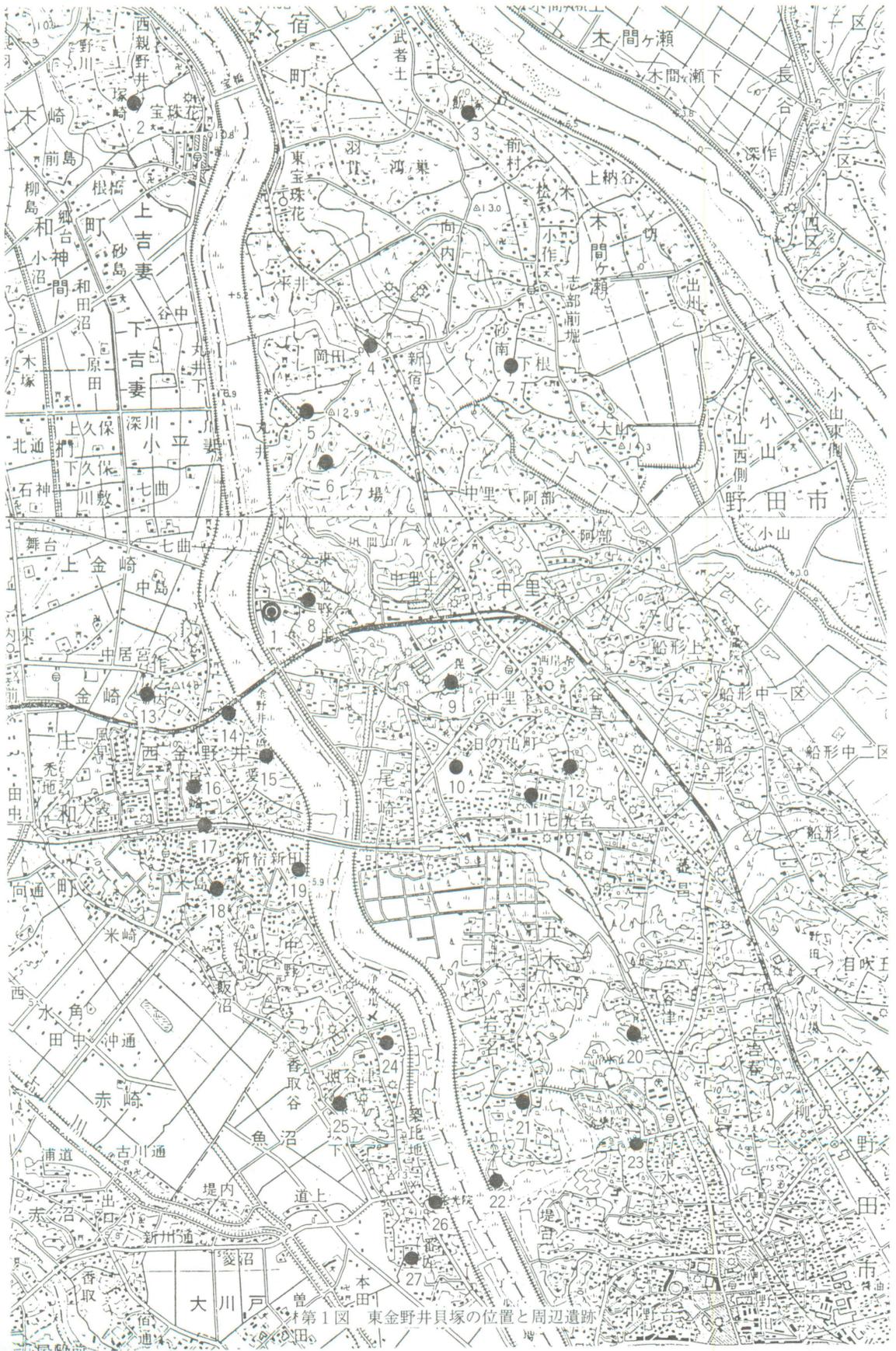
挿図目次

第1図	東金野井貝塚の位置と周辺遺跡	1
第2図	1980・81年の調査	4
第3図	土層柱状図	6
第4図	1 T・2 T	8
第5図	3 T・4 T	10
第6図	5 T・6 T・7 T	12
第7図	8 T	13
第8図	出土土器(1) - 第二群	14
第9図	出土土器(2) - 第一・二群	15
第10図	出土土器(3) - 第二群	16
第11図	出土土器(4) - 第三群	17
第12図	出土土器(5) - 第三群	18
第13図	出土土器(6) - 第三・四群	19
第14図	出土土器(7) - 第四群	20
第15図	出土土器(8) - 第五群	21
第16図	出土土器(9) - 第五群	22
第17図	出土土器(10) - 第六群	23
第18図	出土土器(11) - 第六群	25
第19図	出土土器(12) - 第六群	27
第20図	出土土器(13) - 第六群	28
第21図	出土土器(14) - 第七群	29
第22図	出土土器(15) - 第七群	30
第23図	出土土器(16) - 第六・七群	31
第24図	出土土器(17) - 第五・六・七群	32
第25図	出土土製品・骨角器	35
第26図	出土石器(1)	37
第27図	出土石器(2)	38
第28図	東金野井貝塚の周辺地形	図版扉裏
折込付図	東金野井貝塚地形測量図	巻末

図版目次

- 図版1 東金野井貝塚周辺地形の航空写真—昭和62年撮影—(約1:5,000)
- 図版2 遺跡近景
- 図版3 各トレンチの状況(1)
- 図版4 各トレンチの状況(2)
- 図版5 各トレンチの状況(3)
- 図版6 出土土器(1)—第9・10図
- 図版7 出土土器(2)—第8・11・12図
- 図版8 出土土器(3)—第13・14図
- 図版9 出土土器(4)—第15・16図
- 図版10 出土土器(5)—第17・18図
- 図版11 出土土器(6)—第18・19図
- 図版12 出土土器(7)—第19・20図
- 図版13 出土土器(8)—第21・22図
- 図版14 出土土器(9)、出土土製品・骨角器—第23・24・25図
- 図版15 出土石器—第26・27図





第1図 東金野井貝塚の位置と周辺遺跡

I はじめに

1. 遺跡の立地と環境（第1・28図、図版1）

東金野井貝塚は、野田市東金野井字白幡593他に位置する。首都圏の道路交通の動脈である国道16号線は、野田市の北部の金野井大橋で江戸川を渡って埼玉県へと通じていくが、東金野井貝塚はこの金野井大橋のたもとのすぐ北側にある。千葉県北部に横たわる下総台地は西部にいくにしたがってだんだん低くなっていき、北西端にあたる東金野井貝塚の周辺では台地の標高も12~14mほどしかない。また、台地と低地の比高差も小さく、台地縁辺部の傾斜も緩やかである。江戸川の本流に近いことや、江戸川と利根川の2つの大きな水系にはさまれていることもあって台地もさほど複雑に開析されていない。

現在の利根川は太平洋側に注いでいるが、これは近世の治水工事によるものであって、もともとは東京湾に注いでいた。現在の東京市街地の低地部分がかつては広大な湿地帯であり、長い年月にわたって利根川の運搬してきた土砂が堆積した結果、現在のようなものとなったものである。利根川は「坂東太郎」という別名の通り古来より暴れ川として知られており、やはり埼玉県を流れる荒川とともに大規模な氾濫をしばしば起こし、その度に川筋を変えてきた。その名残は現在埼玉県の東部の低地帯にみられるいくつもの流れにとどめている。また、当然のことながら治水工事もたびたび行われ、河川の流れは縄文時代に比べて大きく変わっている。このような河川の変動は台地の地形も変化させていて、埼玉県東端の江戸川沿いに存在する洪積台地は、かつては千葉県側の下総台地とつながっていたものであるが、現在は江戸川を隔てて東西に分かれている。この地域の遺跡の立地を考える場合、こうした河川の変動を無視することができない。また、縄文時代には幾度か海進現象が起こっているが、南関東の沖積地はその度に海底に没していることが確認されている。特に縄文時代前期においては東京湾の海岸線がはるかに北上し、現在の栃木県南部まで入り込んでいた。東金野井貝塚の存在する台地面もこの海岸沿いにあったものと考えられるが、当然このことはこの貝塚および周辺の遺跡の形成に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

2. 周辺の遺跡（第1図）

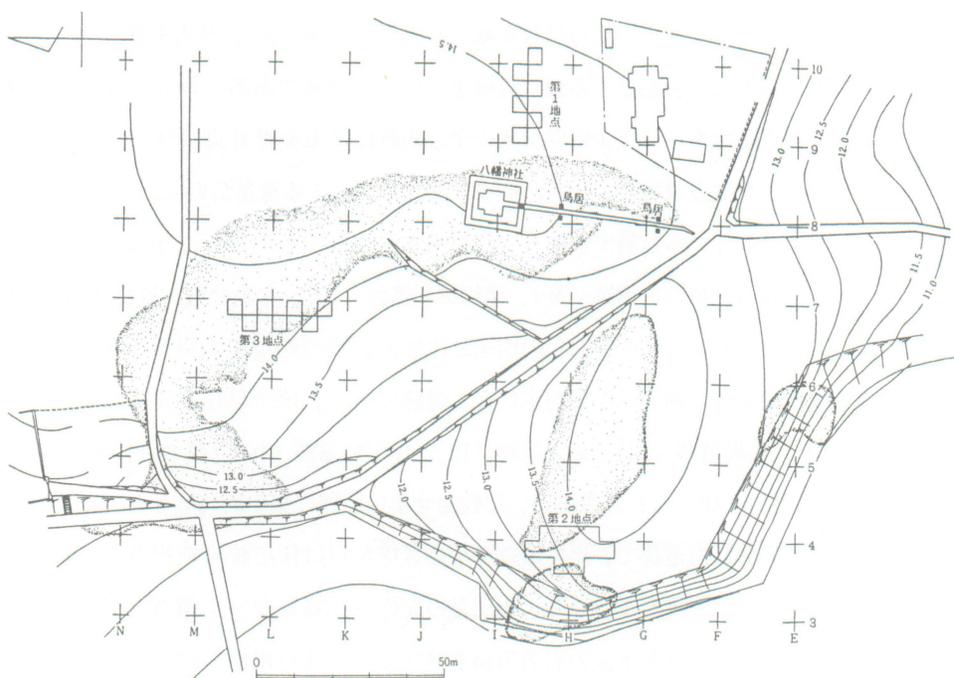
調査が行われているものを中心に、周辺の縄文時代の遺跡について概観する。まず江戸川を5kmほどさかのぼった右岸には神明貝塚（2）が存在する。堀之内式期から加曾利B式期に形成されたもので、埋葬人骨も発見されている。左岸域では2kmほど上流に新宿貝塚（4）、岡田山ノ内遺跡（5）、岡田中ノ内貝塚（6）などが存在する。新宿貝塚は江戸川水系と利根川水系の分水嶺付近に位置し、黒浜式と加曾利E式の住居跡が検出されている。岡田山ノ内遺跡は集落跡と地点貝塚から構成される大規模な遺跡で、加曾利E式と堀之内式の住居跡が検出されて

いる。岡田中ノ内貝塚は前期から後期にかけて形成されたもので、岡田山ノ内遺跡とともに江戸川河岸に位置する。現在の利根川流域に目を転じると飯塚貝塚（3）、砂南南遺跡（7）が存在する。飯塚貝塚は黒浜式を中心とする地点貝層をもつ集落遺跡である。砂南南遺跡は早期から後期にいたる集落遺跡である。東金野井貝塚の至近距離には東金野井東貝塚（8）が存在する。黒浜式を中心とした地点貝塚で、1941年の古代文化学会による遠足会の記録で「東金野井・東斜面貝塚」と報告されている貝層であろう。江戸川本流よりやや奥まった小支谷沿いにもいくつかの遺跡がみられる。槇の内遺跡（9）、尾崎第8遺跡（10）、七光台第1遺跡（11）、七光台第2遺跡（12）などがある。このうち槇の内遺跡は黒浜式期のかなり大規模な集落遺跡である。七光台第1遺跡は条痕文期から中期前半に至る遺跡である。埼玉県庄和町側に目を転じると、風早貝塚（13）、馬場遺跡（14）、愛宕遺跡（15）、尾ヶ崎遺跡（16）、西の宮貝塚（17）、犬塚遺跡（19）、米島貝塚（18）などの遺跡が、比較的せまい範囲に集中的に存在している。いずれも前期黒浜式を中心とした遺跡で、馬場遺跡や米島貝塚からは住居跡も検出されている。さらに下流にいたると台地の標高も高くなり、小支谷の開析も複雑になって遺跡の立地も複雑化する。東金野井貝塚から5 kmほど下流の岩名第14遺跡（22）は江戸川沿いにあたるが、岩名第6遺跡（20）、岩名貝塚（21）、野田貝塚（23）は小支谷沿いに立地する。岩名第14遺跡は条痕文期を中心とした集落遺跡である（財団法人千葉県文化財センターにより1992年に発掘調査が行われ、1993年12月現在整理作業中）。岩名貝塚は前期より形成が始まり、後期にいたる大規模な貝塚である。県指定史跡になっている野田貝塚は後期を中心とした馬蹄形貝塚である。江戸川対岸の埼玉県松伏町には本郷貝塚（24）、浅間貝塚（25）、栄光院貝塚（26）、登戸貝塚（26）が存在する。いずれも前期から後期の遺跡である。

3. 研究略史

東金野井貝塚の存在は古くから知られていたようであるが、発見年次に関する資料は得られなかった。初めて調査が行われたのは1931年で、東京史前学会により行われたものである。ただし、このときの報告は結局なされず、わずかに注口土器が1点、史前学雑誌の巻頭を飾ったのみであった（甲野 1931）。ついで1941年には古代文化学会による遠足会が行われている（古代文化学会 1941）。このときは加曽利B式を中心とする縄文後期の主淡貝塚であることや、堅穴住居跡の存在が確認されている。翌年1942年にはこのとき採取された動物遺存体についての分析結果が報告されており（直良 1942）、シカやイノシシを中心として多量の獣骨が出土していること、魚類は内湾性の小魚類がほとんどであること、貝類ではシジミが圧倒的多数を占め、その他の貝も淡水産のものばかりであることなどが報告されている。

それからしばらくの間、特に調査がされた形跡はなかったが、近年になって野田市も開発の波にさらされるようになり、記録保存のための調査が増加するようになった。そうしたなかで



第2図 1980・81年の調査

比較的遺存状況のよい貝塚について、将来にわたって史跡整備を進めるための基礎資料を得るための確認調査が、野田市教育委員会によって行われることになった。東金野井貝塚もそうした動きを受けて、1980年に確認調査が行われた（野田市郷土博物館 1981、第2図）。このときの成果は概報の形でしか公にはされていないが、貝層は東西100m、南北150mの馬蹄形で、加曾利B式を主体とするものの、出土遺物は関山式から始まって晩期安行式にまでいたっており、この遺跡が極めて長い期間営まれていたことが明らかになった。また、西側の斜面貝層と面状貝層の間に設定された第2地点では住居跡状の落ち込みが多数検出されたほか、面状貝層の内側に設定された第3地点では遺構が切りあって検出されたり焼土やブロック状貝層が検出されており、面状貝層の周囲では遺構の密度がかなり濃いことが推測された。また、包含層の発達著しく、遺構の遺存状況も極めて良好であることが確認された。

それから5年後の1986年には、遺跡内を通る市道の下水管敷設工事のために小さいトレンチがかけられている。ここは1981年調査時の第3地点より西側によった部分で、やや急な傾斜の下側にあたるが、ここも貝層がよく遺存しており、しかも堀之内式を主体とすることが明らかになった。また、貝層から採取されたコラムサンプルの分析も行われたが、獣骨はやはりシカやイノシシが大多数を占めること、魚類も内湾性の小魚類がほとんどであることなどが明らかになっている。

Ⅱ 調査経過

1. 調査方法

この確認調査は、千葉県教育委員会が実施している県内主要貝塚発掘調査の一環として行われ、財団法人千葉県文化財センターが委託を受けたものである。現地での調査は1993年10月1日から10月27日まで実施された。

調査はボーリングによる貝層堆積範囲の把握と、トレンチによる貝層の堆積状況や遺構の検出状況および遺物の出土状況の把握の2本建てで行った。また、貝塚とその周辺あわせて50,000㎡の地形測量を業者委託で行っている。

ボーリング調査は基本的には1992年度に袖ヶ浦市山野貝塚で行われた方法によっている（上守 1993）。ボーリング調査によって把握された貝層堆積範囲は、地形測量図にあわせて掲載した。ただし、農作業の都合上立ち入れなかった場所および地上構築物のある部分については、過去の野田市の成果等を参考に推定復元した。

トレンチはすべて任意に設定し、地形測量の際にトレンチ杭の公共座標値を測定することとした。トレンチは遺跡の北西部を第1トレンチとして、以下北を上にして時計回りに第2、第3と名付け、最終的には第8トレンチまで設定した（トレンチ配置は折込付図に掲載。トレンチ杭の公共座標値は表1に掲載）。トレンチの総面積は200㎡である。なお、文中では例えば第1トレンチは「1T」と略称している。

2. 調査の経過

調査は10月1日より開始され、トレンチ調査とボーリング調査を平行して行った。トレンチの設定場所については5月に行った現地踏査と過去の調査報告を基にして決定したものであるが、現況が畑であるため、農作業の都合上どうしても設定できないところについては変更したところもある。また、今年の夏は天候が不順であったため、作物の収穫が遅れてやむなくトレンチ設定を断念したところもある。

測点名	X座標	Y座標	測点名	X座標	Y座標
1T-N	-780.153	-1010.112	5T-N	-956.202	-927.518
1T-S	-782.129	-1009.810	5T-S	-966.103	-926.239
2T-N	-754.178	-975.154	6T-N	-942.421	-956.654
2T-S	-764.148	-975.697	6T-S	-950.815	-962.134
3T-E	-769.089	-929.841	7T-N	-892.775	-945.294
3T-W	-770.566	-939.726	7T-S	-903.639	-959.632
4T-E	-825.099	-903.192	8T-N	-862.735	-983.650
4T-W	-830.305	-916.180	8T-S	-876.376	-980.570

表1 トレンチ杭座標一覧

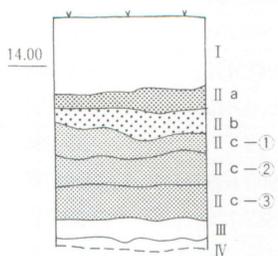
トレンチは全部で8カ所設定したが、一部を除いて包含層が厚く残存しており、特に2Tではソフトローム上面まで1m以上堆積していた。そのため膨大な土量と調査行程とを常に念頭に置いての調査になった。また、貝層付近に設定したトレンチからは遺構が極めて高い密度で検出され、その規模や形態の把握に多くの時間を費やした。限られた時間のなかでの調査であったが、貝層と集落の規模や形態を把握する上で多くの成果をあげ、10月27日に無事終了することができた。

3. 土層説明 (第3図)

前回調査時にも遺跡の特に北部と東部には極めて良好な遺物包含層が堆積していることが報告されているが、今回の調査でもそれが裏付けられている。トレンチの状況と遺物についての説明をわかりやすくするため、4Tのセクション図をもとに縄文時代の包含層について、簡単に説明しておく。

I. 表土層

- II a. 黒色土層 晩期の土器を多量に包含する腐食土層。4Tに特に厚く堆積していた。
- II b. 茶褐色土層 赤褐色テフラが斑状に混入する土層。後期の土器を包含している。4Tでは良好な状態で検出されたが、他のトレンチでは上の黒色土の影響か暗茶褐色に変色している。
- II c. 暗茶褐色土層 堀之内式期以前の旧表土と考えられている層。今回さらに細かく分層することができた。
 - II c-① やや黒色がかった茶褐色土。上のII b層とは不整合であり、テフラが表土化したと思われる。この層は4Tのみで検出され、北側の2T、3Tでは確認できなかった。
 - II c-② 他の層より黄色みがかった茶褐色土。4Tではかなりはっきりと確認できたが、他のトレンチでは下の層との分層が困難であった。ここからは遺物の出土が極端に少なくなる。
 - II c-③ やや黒色がかった茶褐色土。II c-①よりさらに色調が暗くなる。加曽利E式期の住居跡はこの層を掘り込んでつくられている。遺物の出土は少ない。



第3図 土層柱状図 (S=1/50)

III. ソフトローム層

各層が堆積した時期であるが、II b層については加曽利B期以降に属する遺構や貝層などがすべてこの層を切っており、堀之内式に属する住居跡がこの層に覆われていることから、II b層は加曽利B期の初頭に堆積した新期テフラであると考えてよ

い。むしろ注目されるのがⅡc層で、従来単一層と思われていた、あるいは単一層でしか検出されなかったこの層も、時期による分層が可能であることが判明した。Ⅱc層の各層がいつ堆積したかについては、掘っている段階であまり認識していなかったこともあって、土器形式単位にまで踏み込んだ時期特定は難しい。ただし、加曽利E式期の住居跡がⅡc-③とした層を切って構築されていること、やはりⅡc-③層から繊維土器が出土していることから、Ⅱc-③層に関してはすでに中期初頭には堆積していたと考えられる。いずれにしても、今回は残念ながら科学的分析の手を加えることはできなかった。今後調査を行うならば、鉦物分析などによってこれらの層の内容を解明し、堆積時期を推測する必要があるだろう。

4. 各トレンチの状況

1 T (第4図、図版3c)

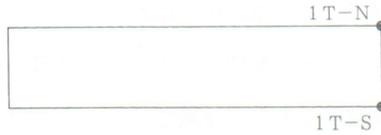
貝殻散布範囲の北西端に設置したもので、貝層の限界を確認するとともに、地形を把握することを目的とした。野田市教育委員会が1986年に調査した地点の至近距離にある。ただし、ボーリングを行った段階ではほとんど貝層も地山のローム層も確認できず、全体に二次堆積であることが予想された。調査は表土から50cmほど掘り下げたが、粘性をもった耕作土が厚く堆積し、ボーリングを行ってもその下も同様の土層が堆積している可能性が強いことが分かったため、調査を終了した。

2 T (第4図、図版3d~h・4a)

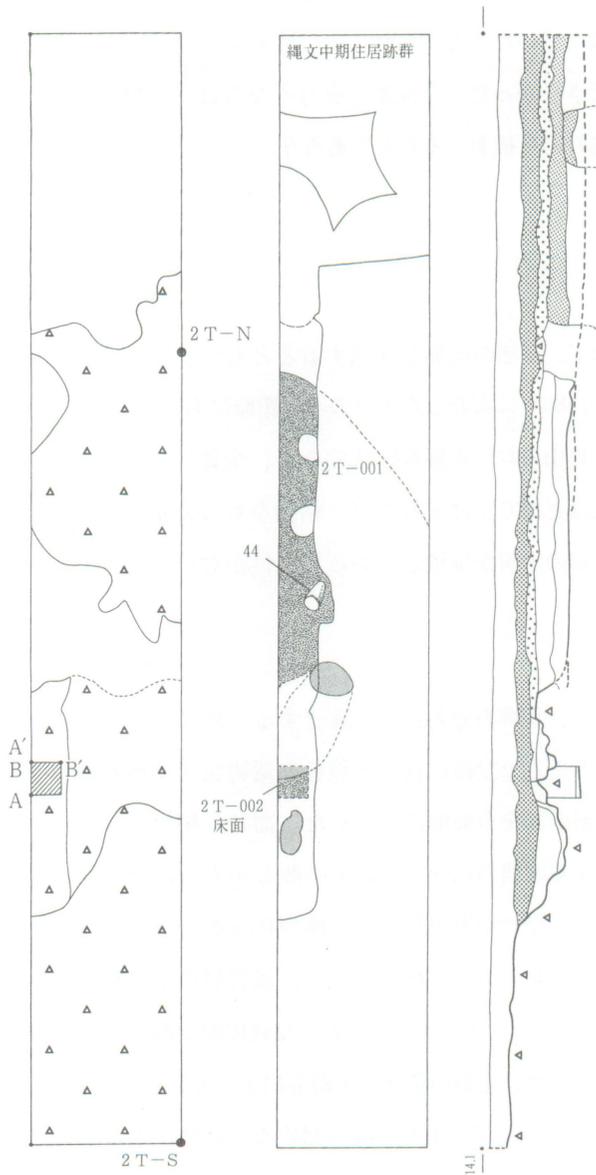
馬蹄形に連なる面状貝層の北側の限界と、遺構の分布状況を確認するために設定した。当初長さ10mに設定したが、表土をはがしたところで全面に貝層と黒色の遺物包含土層が検出されたため、さらに北に4m延長し、黒色土層のみを全面的にはがした。面状貝層はトレンチの南側で表土のすぐ下から検出された。そのすぐ北側の部分では焼土の散布がみられたほか、石皿(遺物番号270・271)や土版(遺物番号242)などが出土し、住居跡の存在が予想された。そのためトレンチの西壁に沿って幅50cmのサブトレンチを入れたところ、包含層の中に縄文後期の2T-001住居跡の床面が確認された。これはロームブロックも混入した硬化面であり、柱穴と思われるピット状土坑のプランもみられた。また、完形の深鉢型土器も出土している(第11図44、図版4a)。ただし、さき出土した土版などは、この住居跡よりはかなり時期が下るものと思われる。

トレンチ北端の貝層のない部分を掘り下げたところ、包含層の下のソフトローム上面で住居跡のプランが4軒分視認され、重層的に遺構が存在しているのが確認された。これらの住居跡の時期についてははっきりとしたことは言えないが、直上から出土した土器から推測すると加曽利E式期の古い段階に属するものと思われる。

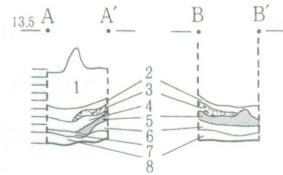
1 T 平面図 (1 : 200)



2 T 平面図・セクション図 (1 : 100)



貝層サンプル採取部分セクション図 (1 : 50)



2 T 貝層サンプル採取部分 土層説明

- 1 混土貝層 ヤマトシジミに黒褐色土層含む。貝の堆積はランダム。
- 2 混貝土層 暗褐色土にヤマトシジミ含む。上・下層とは土の差が歴然としているが、境は漸移的。
- 3 混土灰層 白い灰と細かい破砕貝に黒色土・炭化物が混じる。
- 4 混土貝層 灰色に焼けた破砕貝と黒色土・炭が混合する。
- 5 混土貝層 灰色に焼けた破砕貝に焼土粒・黒褐色土が混じる。A-A'では焼土少ないが、B-B'ではとても多い。
- 6 混土貝層 やや保存の悪いヤマトシジミに黒褐色土含む。貝の方向はランダム。
- 7 黒褐色土 ややくすんでいる。黒褐色土にローム粒斑状に含む。
- 8 暗褐色土 硬くしまったロームに貝を若干含む。6、7は締まりなく、本層との境は水平で明瞭。

※セクション図左側の水平線は、コラムサンプルのカットごとのレベルを示す。

第4図 1 T・2 T

包含層中から検出された住居跡には面状貝層よりひと続きになったブロック状貝層が検出された。このブロック貝層の性格を調べるため、貝層のコラムサンプルを採取した。貝層部分を抜いたところで床状の硬化面が検出された。当初は深鉢が出土した2 T-001住居跡と同一のものと思われたが、深さが違うことや、後から調べたところコラムサンプルの時期が加曽利B式期

であったため、2 T-001住居跡より新しい加曽利B式期の住居跡が存在したものと考えた。この部分の周囲からは多量の焼土が検出され、また、コラムサンプル採取部分からも灰層がかなり良好な状況で検出されたが、これらが遺構面を形成していた痕跡はみられなかった。(図版3 g・h)

3 T (第5図、図版4 b・c)

貝塚の北東側の遺構の分布状況を確認するために設定した。このトレンチも2 Tと同様にかなり包含層が厚く堆積しており、ソフトローム上面までの掘り下げは、最終的には幅1 mのサブトレンチによって行った。上部の黒色土および新期テフラには縄文後期の土器が多量に包含されていたが、そこより下部のⅡ c層からは加曽利E式土器が多量に出土した。トレンチの位置から考えて当然遺構の存在も考えられたが、住居跡2軒分のプランを確認できたのはソフトローム上面まで掘り下げてからであった。ただしセクションを観察すると、いずれの住居跡もⅡ c層半ばより掘り込まれているのが確認されている。第8図1の深鉢型土器はⅡ c層下面よりやや上のレベルから出土したが、土層観察の結果から、この土器は3 T-001住居に帰属するものと思われ、黒色土層を切っているのが確認されている。

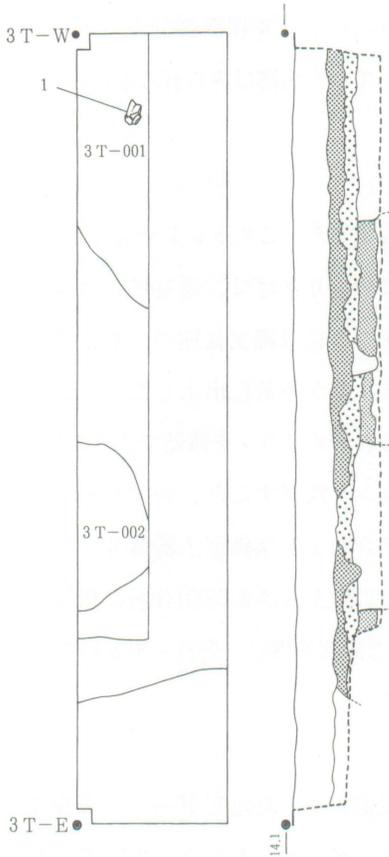
4 T (第5図、図版4 d・e)

貝層の東側の状況と遺構の分布を確認するために設定した。ただしボーリング調査で貝層にあたった部分には耕作物が存在したため、最終的には貝層にかかるように設定できなかった。40cmほどの表土を除去したあとは晩期安行式、特に安行3 c式土器を多量に包含した黒色土層が検出された。それを除去した段階でさらにローム上面まで極めて厚い包含層が存在することが予想されたため、1 m幅のサブトレンチを設定してそこだけ掘り下げた。黒色土の下には新期テフラがブロック状に混入したⅡ b層が検出され、縄文後期の土器が極めて多量に出土している。さらにその下にはやや黄色みがかった茶褐色のⅡ c層が検出された。厚さは60cmほどで、前項で述べたとおり3層に分層された(図版4 e)。この上の部分からは中期・後期の土器が出土したが、下部は極めてしまりが強く、遺物はほとんど出土しなかった。遺構はいずれも奈良・平安時代かそれ以降のもので、縄文晩期の包含層を切っている。

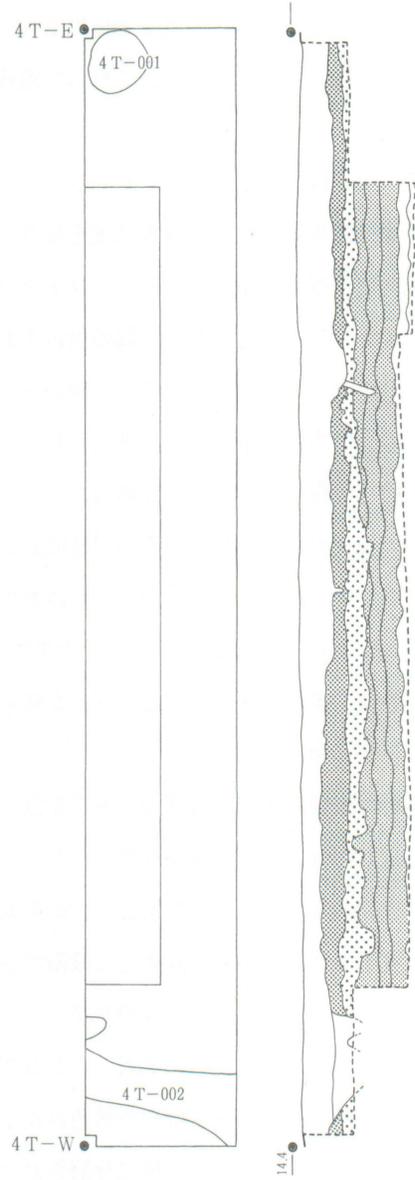
5 T (第6図、図版4 f)

遺跡の南東部の地形と遺構の状況を調べるために設定した。この付近には貝殻の散布はみられなかったが、土器片が地表面に散っており、遺構が存在する可能性があったからである。ただし、当初意図していた位置より若干斜面の下側に変更した。厚さ20cmほどの表土を除去した段階で、淡橙色の砂質土が検出された。うねと同一の方向をとる溝状のくぼみも検出されたため、地表の耕作の影響をかなり受けていることが確認された。遺構は検出されなかったが、出土した遺物にはやや大きめの土器片もいくつかあるため、斜面の上側および西側には遺構が存

3 T 平面図・セクション図 (1 : 100)



4 T 平面・セクション図 (1 : 100)



第5図 3 T・4 T

在する可能性もある。土器は加曽利E式が多く、後期の土器も若干みられた。トレンチの南側では淡橙色の砂質土は地表面よりもかなり急な斜面となって谷に向かって傾斜しており、表土より2 m掘り下げたところからは水分を多量に含んだ泥炭質の腐食土層が検出されている。淡橙色の砂質土が後世の攪乱をかなり受けたこととあわせて考えると、遺跡が形成された当時は現在よりかなり比高差の大きな谷であったと思われる。腐食土部分については、低湿地遺跡の存在の可能性もある。

6 T (第6図、図版4 g・h)

南端の貝層の堆積状況と遺跡南側の地形を確認することを目的として設定した。ただし、現地踏査の段階では貝層自体の分布範囲を正確におさえることができなかったため、貝殻散布範

囲の端に設定した。調査は表土から10cmほど掘り下げた段階で、ハードロームが露出した。表土に散布している貝殻が流れ込みであることを確認して調査を終了した。ただし、同じ斜面の別の地点ではブロック状の貝層の存在が確認されている。

7 T (第6図、図版5 a・b)

遺跡西側の面状貝層の状況を確認することを目的とし、また、貝層サンプルの採取に適しているのではないかと考え、設定したトレンチである。

貝層は表土より30cmほど掘り下げたところで検出された。ただし破砕貝が大量に混入している表土との区別が難しかった地点もある。また、貝層自体は面状に広がるものの、その表面の状況は決して一様ではなく、貝殻が直径40cmほどのブロック状に集中している地点と破砕貝を主とする面とが混在している。トレンチのちょうど中ほどの、貝殻がブロック状に集中している地点からコラムサンプルを採取した(図版5 b)。

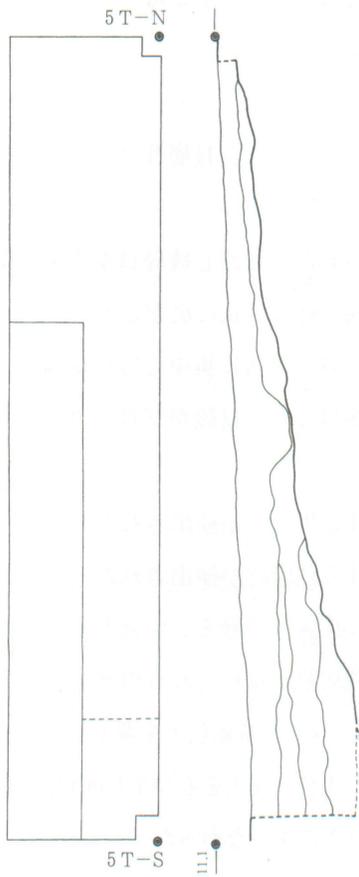
トレンチの東端の部分に晩期の土器を多量に包含する黒色土が検出された。そこで幅1mのサブトレンチを入れたところ、この黒色土を覆土とする住居跡が検出された。当初は1軒のみと思われたがセクションを観察したところ、2カ所に住居跡の壁らしい立ち上がりが見られること、包含されている土器の時期の違いから2軒の住居跡が存在するものと考えた。時期の古い7 T-002住居跡は加曾利B式期のもので、やや焼土を含んだ茶褐色土を覆土としている。それと重複して安行3 a～3 c 式の土器を多量に包含する黒色の覆土をもつ7 T-001住居跡が存在する。ただし、いずれもプランは不明瞭で、推定復元せざるを得なかった。

トレンチの西側には新期テフラとその下の包含層が検出されたのみで遺構は7 T-003土坑が1基検出されただけであった。ただし他のトレンチに比べて縄文前期後半の土器が多く出土しており、同時期の遺構がこの付近に存在する可能性が大きい。

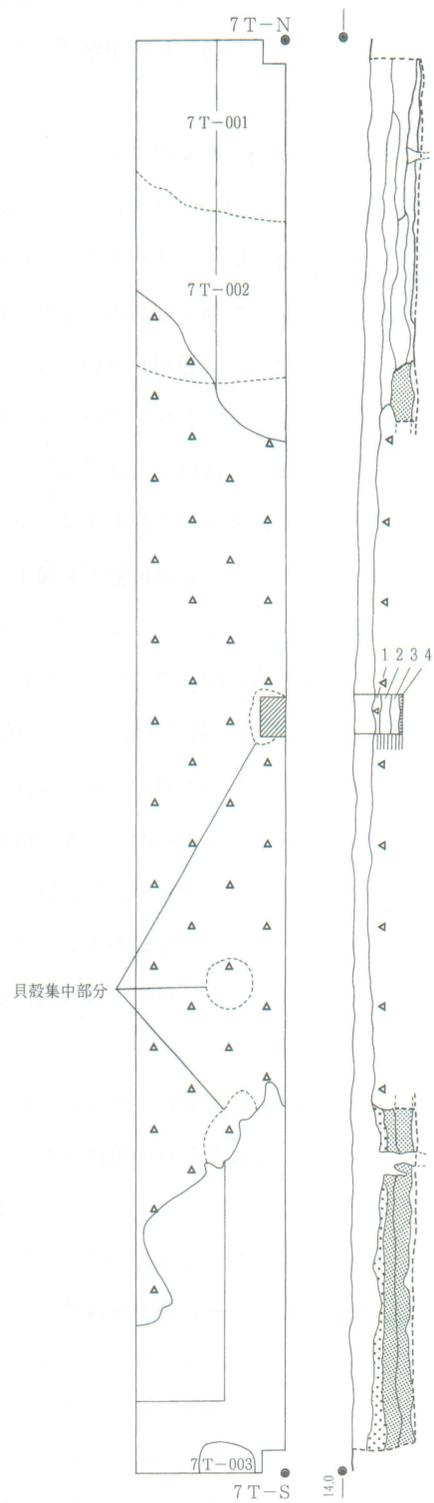
8 T (第7図、図版5 c～h)

西側貝層の状況を調べるとともに、貝層の内側の遺構の状況を調べる目的で設定したトレンチである。しかし、表土にはかなりの破砕貝が混入していてボーリング調査で苦労したこと、場所によってかなりの転圧がかかっていたことなどから、あるいはかなり破壊されているのではないかという危惧もあった。厚さ30cmの表土を掘り下げたところ、トレンチ南端において面状貝層が検出された。そこより北側からは晩期の土器を多量に含む黒色土が検出されたが、これはトレンチ全面に広がるものではなかったため、この黒色土は遺構に伴うものではないかと予想された。そこでトレンチ西壁に沿ってサブトレンチを入れたところ、3軒の住居跡が検出された。そのなかでもっとも古いのは、貝層の下から検出された8 T-002住居跡で、出土遺物から堀之内式期であろうと思われる(図版5 f)。面状貝層はこの住居跡の覆土の上に堆積しており、住居の廃絶から貝層の形成まではかなり時間差があるものと思われる。次につくられたのは8 T-003住居跡で、これは8 T-001住居跡と8 T-002住居跡との間にテラス状の床面として検出

5 T 平面図・セクション図 (1 : 100)



7 T 平面図・セクション図 (1 : 100)



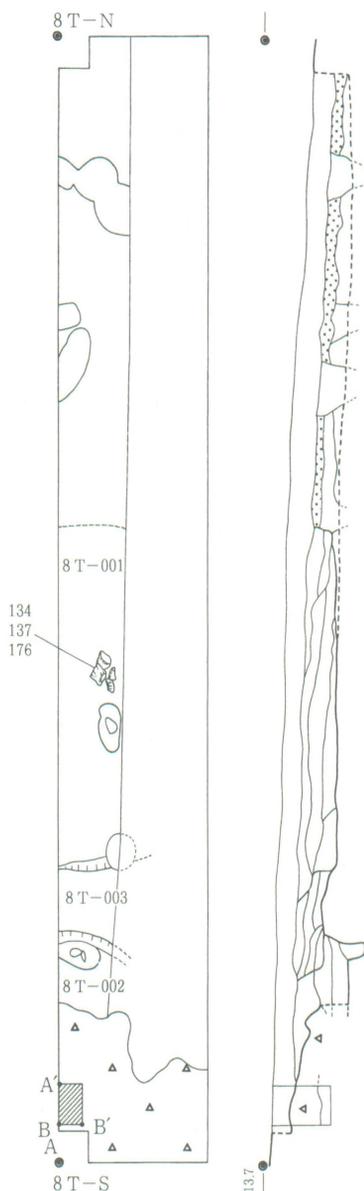
6 T 平面図 (1 : 200)



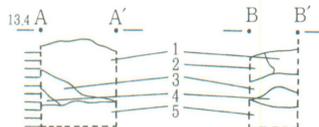
※貝サンプル採取部分の土層説明は第7図参照

第6図 5T・6T・7T

8 T 平面図・セクション図 (1 : 100)



8 T 貝層サンプル採取部分セクション (1 : 50)



8 T 貝層サンプル採取部分 土層説明

- 1 混土貝層 ヤマトシジミを主体とし、茶褐色土が混入する層。灰の混入もみられる。
- 2 混土貝層 貝がかなり密集した層。灰の混入もほとんどない。
- 3 混土貝層 1とよく似ているが、貝がやや少ない。灰が斑状に流入する。
- 4 混土貝層 灰の混入が極めて顕著な層。南側から流れ込むように堆積する。
- 5 混貝土層 貝がわずかに混入するだけの黒褐色土層。8T-002の覆土であろう。

7 T 貝層サンプル採取部分 土層説明

- 1 混土貝層 ヤマトシジミを主とする貝層。
- 2 茶褐色土 破砕貝が混入する層。しまりやや強い。
- 3 黒褐色土 破砕貝がわずかに混入する層。しまり弱い。
- 4 茶褐色土 ローム粒わずかに混入する。しまり弱い。

第7図 8 T

された。当初は性格がつかめないでいたが、セクションには立ち上がりがみられたこと、8 T-002住居跡の覆土にロームブロックを含む貼り床状の床面が検出されたことから住居跡と認定したものである。最も新しいのは001号住居跡で、当初検出された黒色土はこの住居跡の覆土であった。床面はあまり硬化しておらず、不整形の土坑状の落ち込みもみられた。遺物の出土は多く、床面からは第18図134・137、第20図174のような資料が一括出土している（図版5 e）。これらの遺物から、時期は安行3 aであろうと考えられる。8 T-001住居跡のさらに北側からは大小のピットが検出されたが、これらの時期や性格についてははっきり突き止めることはできなかった。なお、面状貝層より貝層のコラムサンプルを採取している（図版5 g・h）。

Ⅲ 出土遺物

1. 土器

今回の調査で最も多かったのは土器である。なるべく多くの資料を掲載するようにつとめた
が、最終的には多くの良好な資料を割愛せざるを得なかった。したがって、今回の報告は出土
資料のおおまかな様相を示すものである。また、原則として時期ごとに並べているが、スパー
スの都合上、あまり厳密にできなかったところもある。

遺物の時期について、便宜的に次のように分類した。

- | | | |
|-----|----------|---------------|
| 第一群 | 縄文時代前期 | (黒浜式、諸磯式、浮島式) |
| 第二群 | 縄文時代中期 | (阿玉台式、加曾利E式) |
| 第三群 | 縄文時代後期前葉 | (称名寺式、堀之内式) |
| 第四群 | 縄文時代後期中葉 | (加曾利B式、曾谷式) |
| 第五群 | 縄文時代後期後葉 | (安行1・2式) |
| 第六群 | 縄文時代晩期前葉 | (安行3 a・b式) |
| 第七群 | 縄文時代晩期中葉 | (安行3 c・d式) |

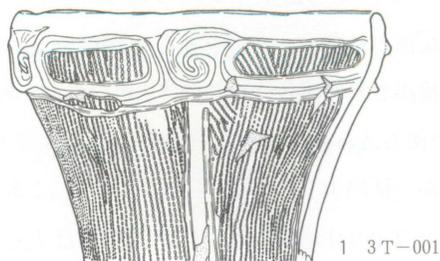
(1) 挿図の説明

第一群土器 (第9図2～8、図版6)

2～4は黒浜式に属する繊維土器である。2はコンパス文が施される。3は底部で直径は推
定6.3cm、胴部側に沈線が格子状に施文される。4は組紐文が施されるもので、口縁上には小突
起がつく。5は半裁竹管による文様が施されるもので、諸磯a式に属するもの。6は横位の沈
線の上にボタン状の瘤が貼り付けられるもの、7は波状腹縁文を横方向に施文されるもの、8
は綾杉状の沈線の上に瘤を貼り付けられるものである。6・8は諸磯c式、7は浮島Ⅱ式であ
る。

第二群土器 (第8図・第9図9～24・第10図、図版6・7)

9～14は中期前葉に位置するものである。9・10は口縁直下に鋸歯状の貼付隆帯と連続爪形

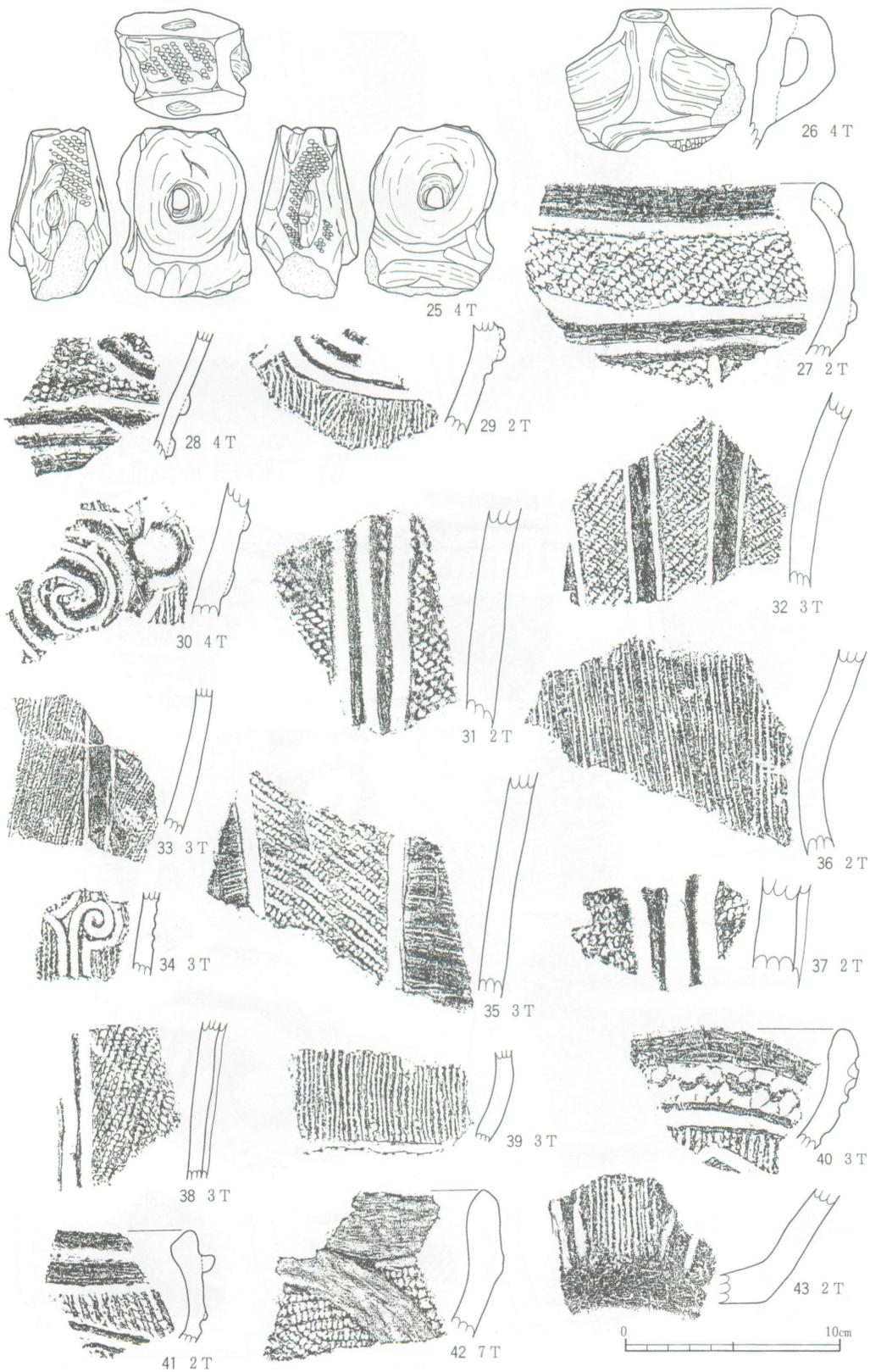


第8図 出土土器(1)

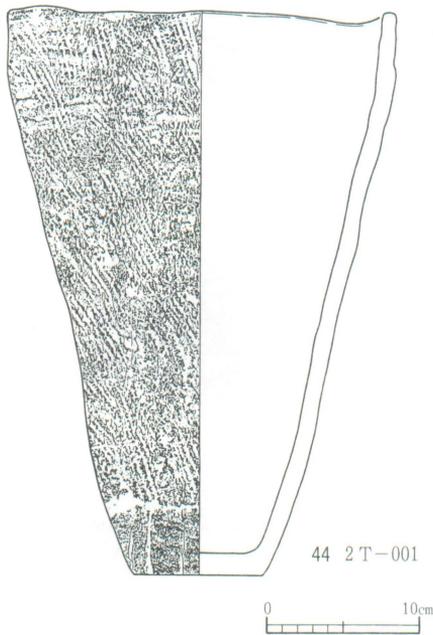
文で構成されるもので、勝坂式の影響が顕著で
ある。11は貼付隆帯で区画された口縁部文様帯
を細沈線や波状沈線などで充填するもので、阿
玉台式に含まれるものであろう。12～14は阿玉
台式に属するものである。13は大きく肥厚させ
た口唇上で隆帯を削り出すもの。14は口縁部を
無文化し、隆帯で区画された頸部に連続押し引
き文を施すもので、浅鉢と思われる。1・15～



第9图 出土土器(2)



第10图 出土土器(3)



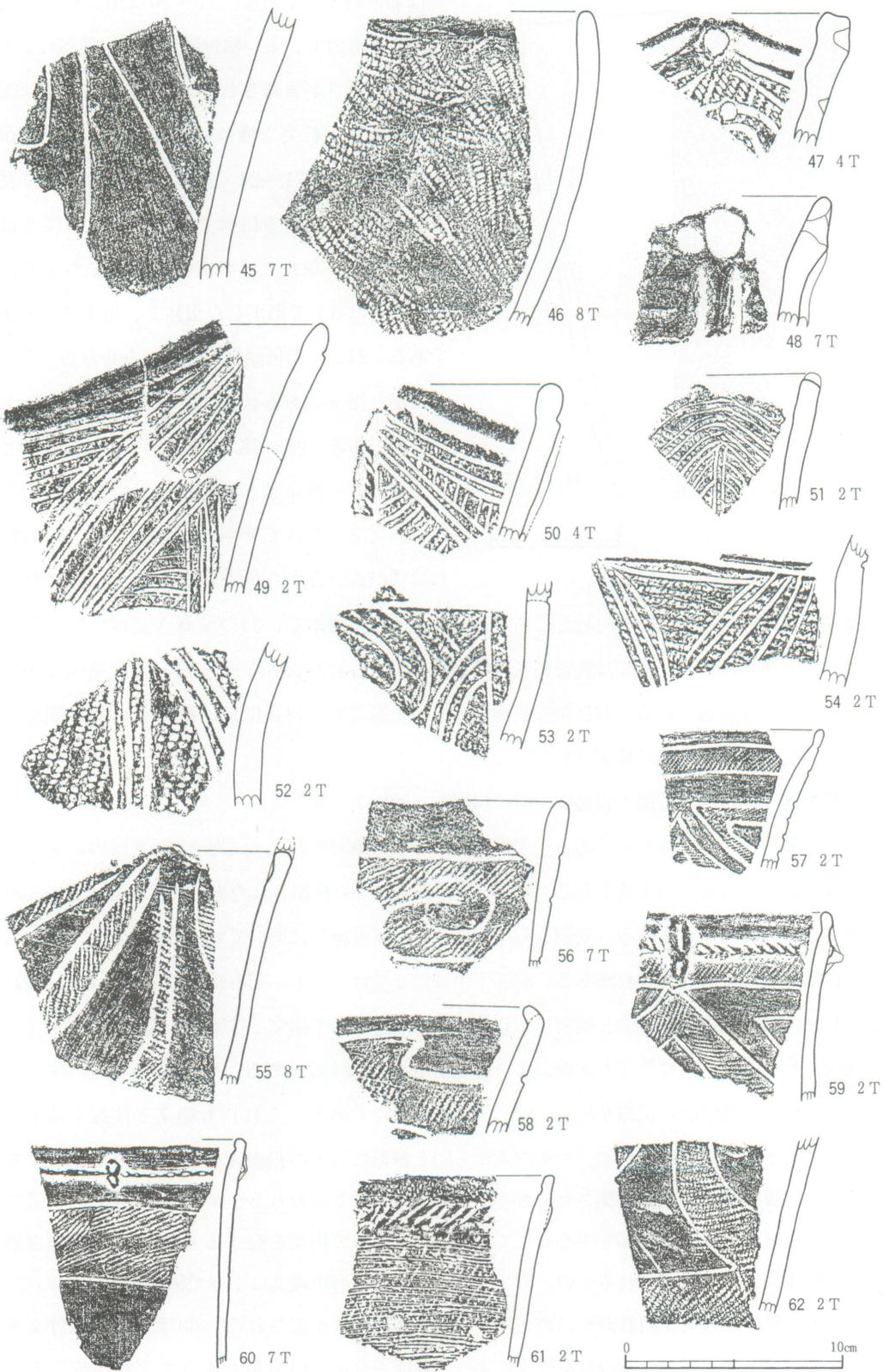
第11図 出土土器(4)

43は加曾利E式である。15～20は加曾利E I式に属するもので、太い貼付隆帯と深い沈線によって彫りの深さが強調される。15・16では棒状工具による交互刺突や撚糸文による区画の充填がみられる。1・21～24・27は加曾利E II式に属するものと思われる口縁である。彫りの深さは影をひそめ、かわりに磨消縄文が目立つようになる。1は3Tで出土した深鉢で、地文は撚糸文である。24には赤色顔料の付着がみられる。25・26は飾り把手である。いずれも古い段階に属するものである。28～38は胴部破片である。ほとんどが縄文・撚糸文と沈線によって構成されるが、施文法によって時期差があるため、おおむね時期が古い方から順番になるように並べた。

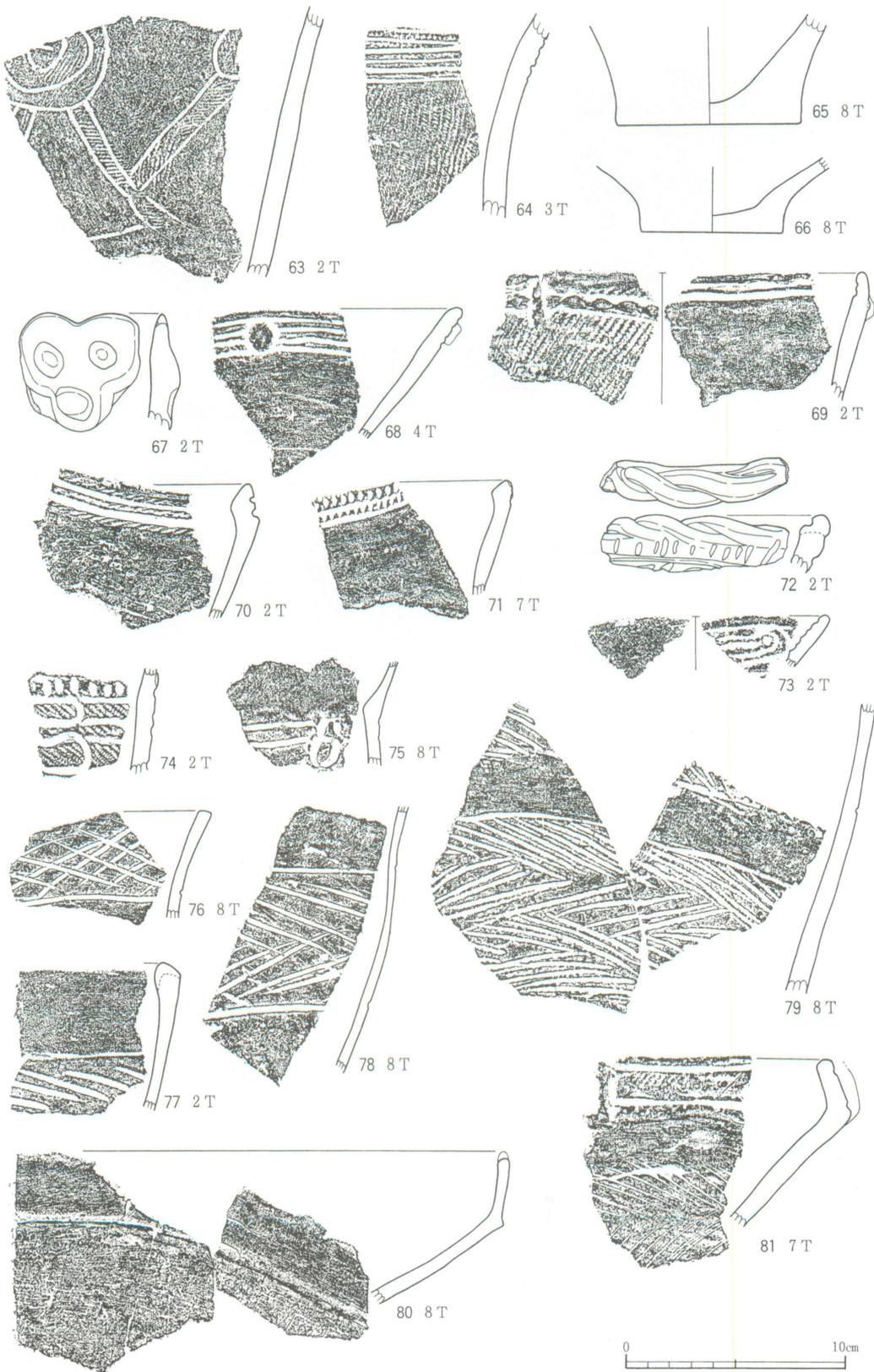
28は貼り付け隆帯をもつ口縁付近部である。33・34は同一個体で、34の渦巻き文様は削り出しによって表現される。35～38は加曾利E III式以降に属するものであろう。39～41は連弧文土器で、全て撚糸文が施される。42は微隆起線文をもつ土器で加曾利E IV式にあたる。43は底部である。縄文ではなく沈線で施文されている。

第三群土器（第11図・12図・13図63～67・14図93、図版7・8）

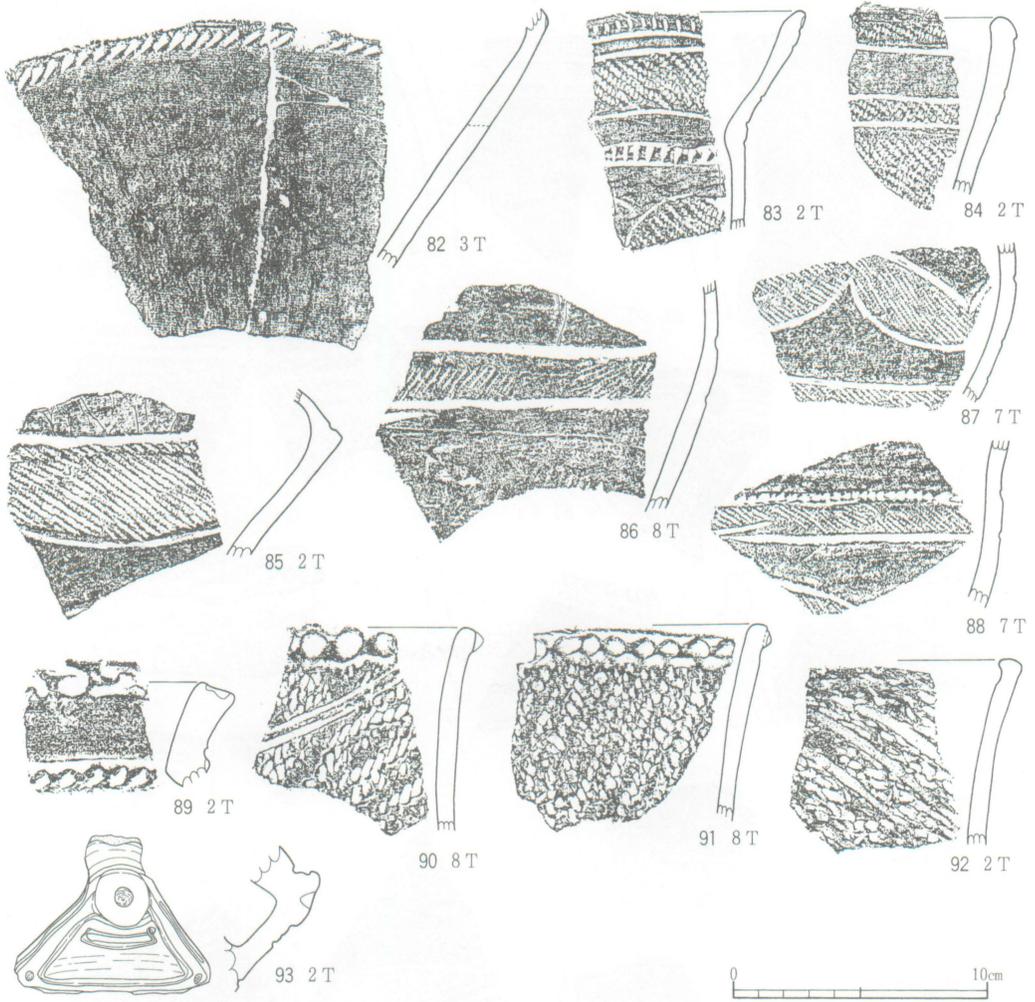
45は称名寺式に属するものである。丁寧なミガキ状の調整を施した器面に細沈線のみ施される。44と46～54は堀之内1式である。44は2Tの住居跡から検出されたもので、全面にRLの単節縄文が施された深鉢である。底部から口縁に向かって直線的に開いていく器形をしているが、胴部にはほんの少しのくびれがある。胴部下半は熱を受けている。46も縄文のみ施されるもの。47・48は波状口縁の波頂部で、刺突ないしは穿孔を中心として縄文と沈線または貼付隆帯によって構成される。49～51は縄文と沈線によって施文された口縁部である。いずれも波状口縁で、縄文施文後に幾何学状に沈線を施す。52～54は胴部破片である。これらも縄文と沈線を基本とするものだが、強く外反する52、やや内湾する53と器形に若干の差がみられる。54は横走る沈線の下に幾何学状の沈線が施されるもので、口縁部直下と思われる。55～64は堀之内2式である。55は波状口縁の波頂部を中心として、放射状に帯状の縄文を配するもの。56・58は雲形の磨消縄文によって構成されるもの。57・59は幾何学状の磨消縄文によって構成されるもので、59は刻み目付き隆起線を口唇直下にめぐらせ、8の字貼付文が配される。60は8の字貼付文をもつ刻み目付き隆起線と帯状の磨消縄文によって構成される。61も似たような文様構成であるが、刻み目付き隆起線がヘラ状工具によるキザミのある隆帯に置き換えられ、胴部も縄文の上



第12图 出土土器(5)



第13図 出土土器(6)

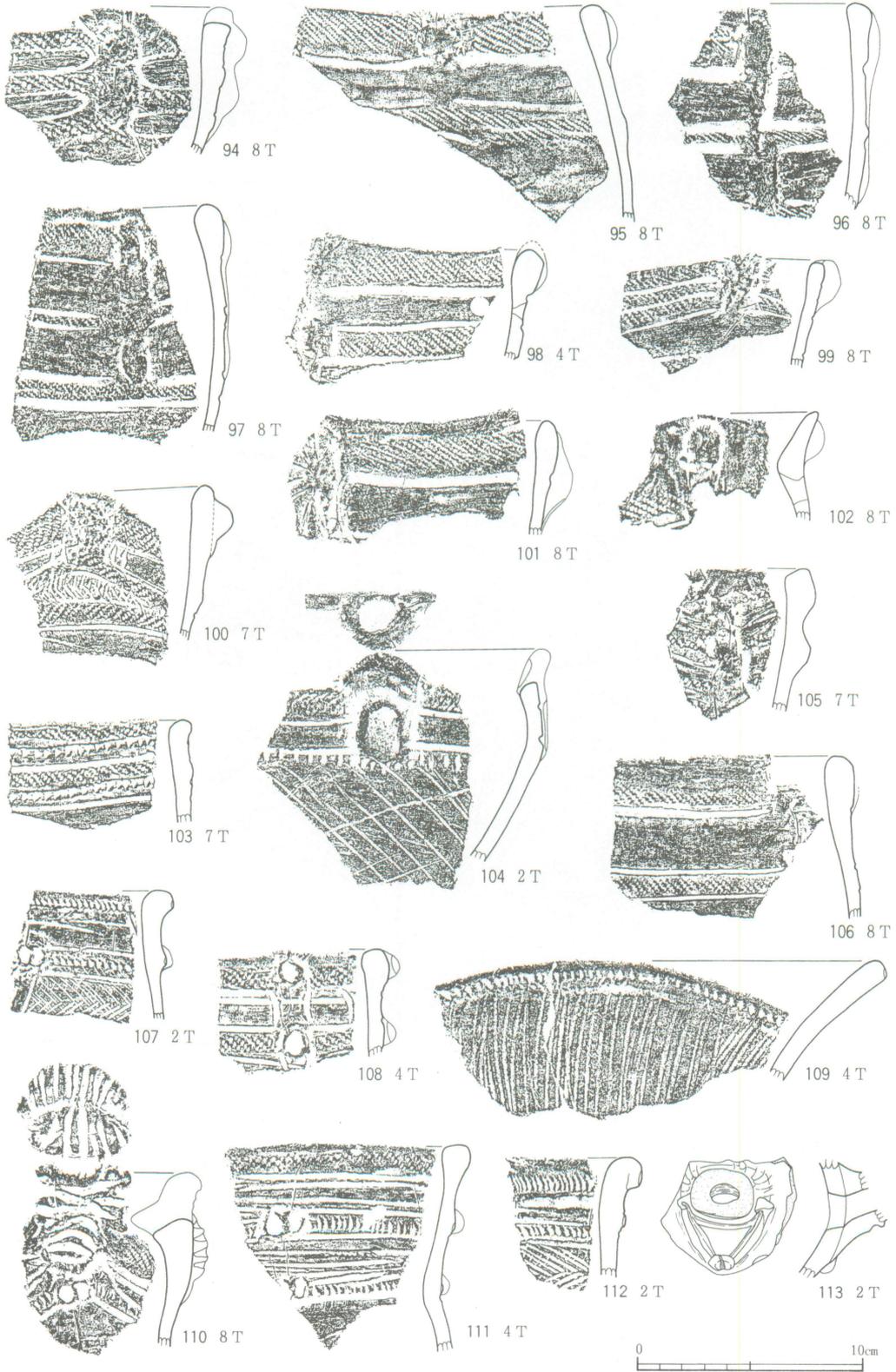


第14図 出土土器(7)

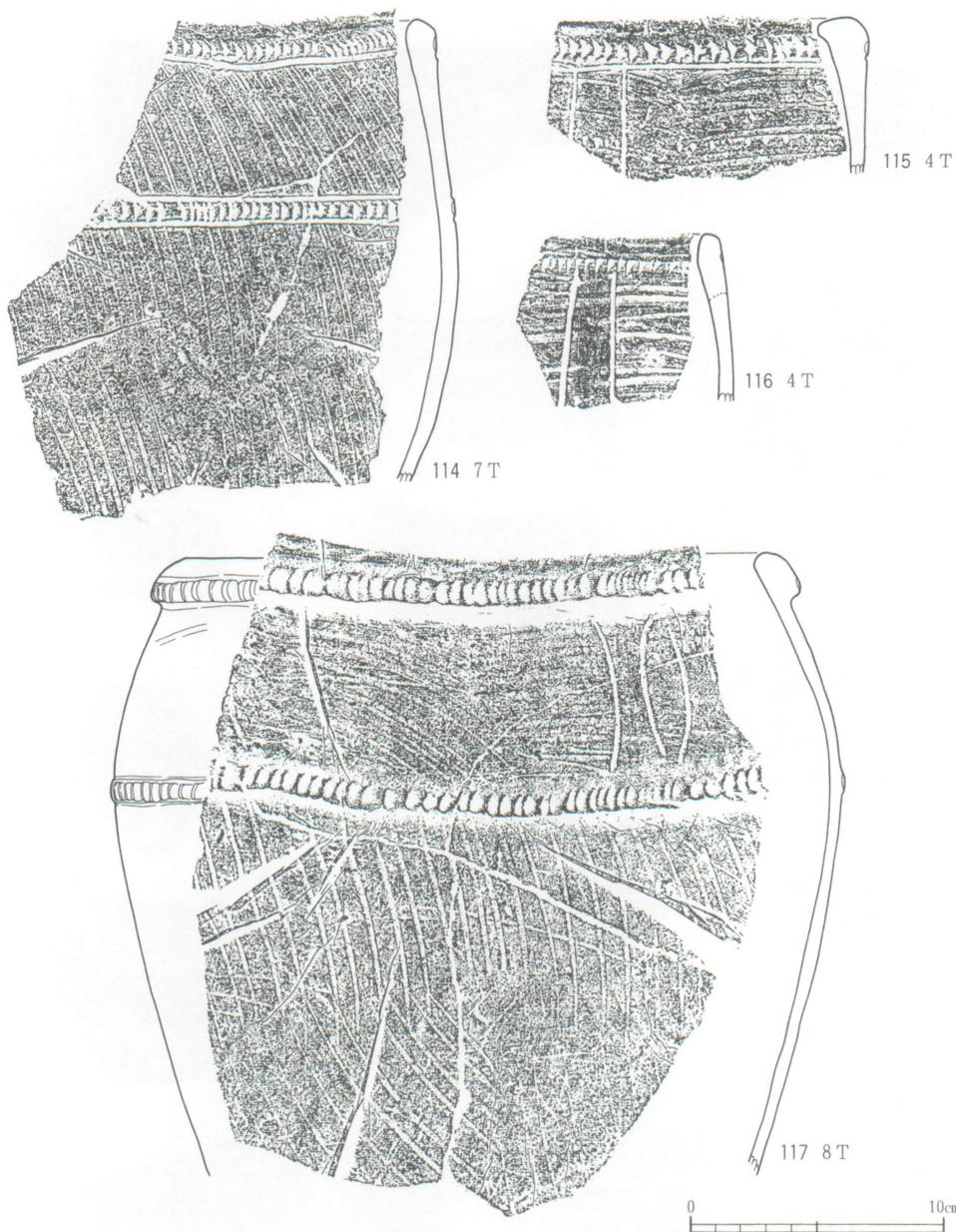
に横走沈線が施される。62～64は胴部破片である。62は磨消縄文を幾何学状に配するもの、63は同心円と帯状の磨消縄文の組み合わせにより構成されるもの、64は縄文と沈線が施されるものである。65・66は底部である。文様は施されないが、いずれも器面には丁寧なミガキ状の調整が施される。67は飾り把手と思われるものである。3ヶ所にくぼみがみられ、あたかも人面であるかのような印象を与える。93は注口土器の把手である。

第四群土器（第13図68～81・第14図、図版8）

68～70・72は加曽利B 1式の口縁である。68～70は隆帯ないしは沈線で口縁部文様帯を形成するもので、貼付瘤などが配される。69には内面にも沈線が施される。72は粘土ひもを縄状に撚り合わせたような特異な飾りをもった口縁部で、時期の特定が極めて困難であったが、胎土や焼成などから加曽利Bとみなした。73は内面に沈線が施されるもので、極めて小さな土器である。74・75はこれらと同時期の胴部破片である。76～82は加曽利B 2式で、沈線を主体とした文様構成をとるものである。76は波状口縁で、口縁部文様帯に沈線が施されるもの、77は逆



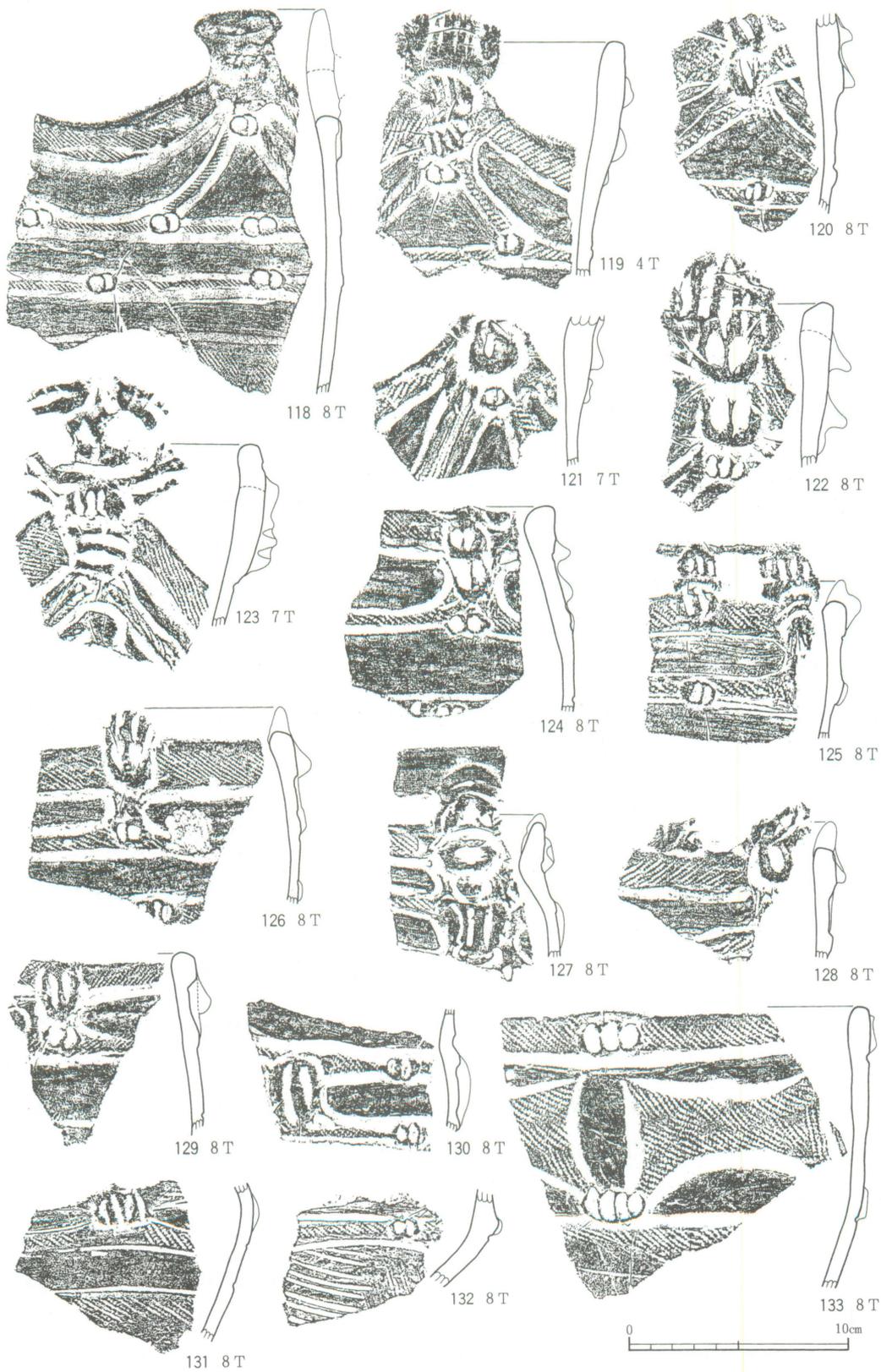
第15图 出土土器(8)



第16図 出土土器(9)

に口縁部が無文化され、胴部以下に沈線が施されるものである。82は内湾する口縁をもつものと思われるが、輪積痕よりはがれてしまっている。71・83～86は加曾利B 3式に属するもので、帯状の磨消縄文を特徴とするものである。83は胴部がくびれに刻み目文が入る。85はソロバン玉型の器形をもつ浅鉢である。87・88は曾谷式に属するものである。連弧状帯縄文や三角形刻み目文を特徴とする。89も特異な文様を口唇上にもつ土器で、これも胎土や焼成からこの時期とみなした。90～92は粗製土器である。縄文を地文として、90・91には口唇直下に紐線文を配し、90・92には条線が施される。

第五群土器（第15・16図、図版9）

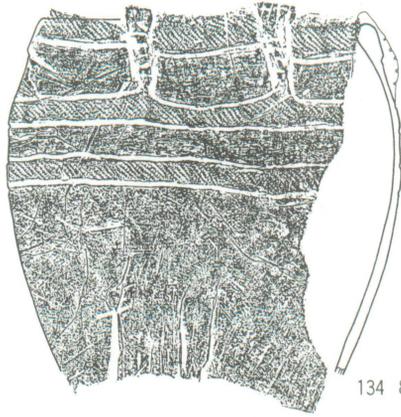


第17图 出土土器(10)

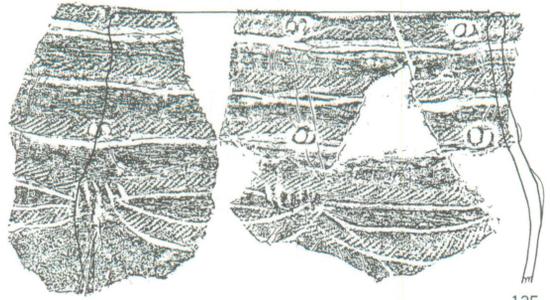
94~106は安行1式の口縁である。口唇直下の二条ないし三条の帯縄文と縦長の貼付文により構成される。94は貼付文の上の口唇上に小突起をつける。100は帯縄文によって区画された三角形をくの字状の沈線で充填する。102は波状口縁の波頂部であるが、貼付文の下に穿孔がみられる。103は帯縄文の下に三角形刻み目文を施す。104は帯縄文は一列のみで、貼り付け文の下側の高さで刻み目を並べる。その下には条線を施す。105は波状口縁の波底部で、二条目および三条目の帯縄文は極めて細い。107~112は安行2式の口縁である。二条ないし三条の刻み目文とブタの鼻状貼付文によって構成される。刻み目文の間は沈線が充填されるほか、その下にくの字状沈線を施すものもある。107・108は平口縁のもので、平行刻み目文が口縁部をめぐる。109は台付き鉢の口縁と思われ、口唇部の刻み目文と縦方向の条線により構成される。110は波状口縁の波頂部で、貼付瘤による飾りが目を引く。口唇部には帯縄文が施され、その下は刻み目文によって三角形に区画される。111は口唇直下のみ帯縄文で、その下側は刻み目文が施されるもの。113は注口土器の注口取り付け部である。下部にある貼付文から後期安行であると考えられる。114~117は粗製土器である。114~116は刻み目文と条線によって構成されるもので、安行1式である。117は膨らみのある胴部に紐線文と条線を施すもので、安行2式に属するものであろう。ただし、形態的には安行3a式に極めて近い。

第六群土器（第17~20図・第23図216~226・228、図版10・11・12・14）

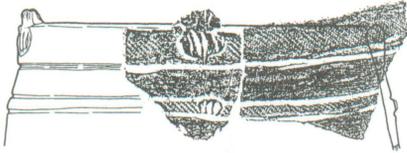
晩期安行式土器は極めて多量に出土したため、いくつかのグループに分けて掲載した。第17・18図は後期安行式の伝統を受け継いでいるグループで、帯縄文と貼付文を主体とした文様構成をとるものである。118~123は波状口縁の深鉢で、口唇直下に太い帯縄文を配し、細い帯縄文で波頂部の下を三角形に区画し、ブタの鼻状貼付文を交点などに配する文様構成を基本とする。波状口縁の突起の装飾は後期安行式の形態の影響を色濃く残している。帯縄文の間の無文部はミガキ状の調整を施してかなり丁寧に仕上げている。118・119では帯縄文に沿った沈線はナゾリ状のものでかなり浅く、後期安行式の手法をかなり強く残している。118では波頂部の下に貼付瘤が存在した痕跡がある。123はこれらの仲間に含まれるが、波状口縁の突起が晩期的な意匠になっている。124~128・134・136・137は平口縁に飾り突起をもつものである。そのうち124~128・136は二段目の帯縄文が極めて細く、やはり後期安行式の影響が強い。134は胴部に張りをもつやや大形の深鉢で、帯縄文はかなり幅が広くなり、帯縄文同士も間隔が広がる。キザミをもつ縦長貼付文は二段目まで伸びており、2カ所を一組として全部で4対になるものであろう。137は直立気味の口縁部をもつ深鉢で、突起の配置は134とほぼ同じであろう。沈線のある縦長貼付文が帯状文の三段目まで伸びている。130~132はこれらの胴部にあたるものである。132は安行2式にみられた刻み目文が細い帯縄文に置き換わったものである。129・133・135・138~141は平口縁の深鉢で、帯縄文と貼付文によって構成される。135は胴部に屈曲をもつ深鉢で、屈曲部分に平行の帯縄文と弧状の帯縄文を配する。129・133・135・141はブタの鼻状貼付文を



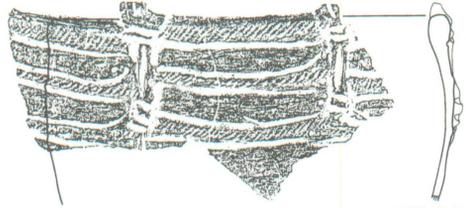
134 8T-001



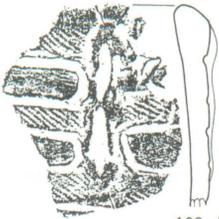
135 8T



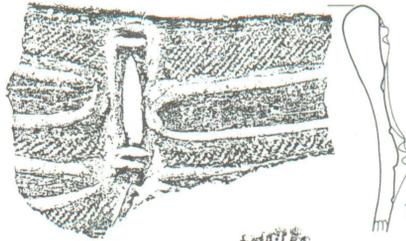
136 8T



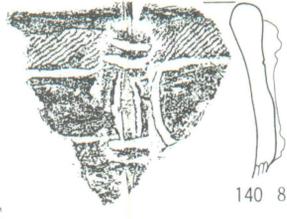
137 8T-001



138 7T



139 8T



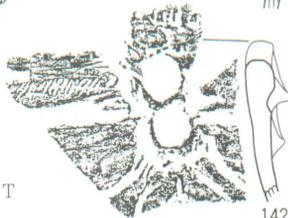
140 8T



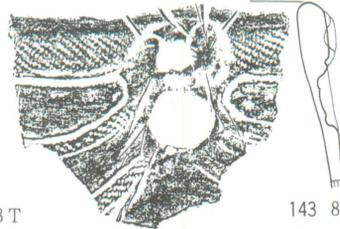
141 7T



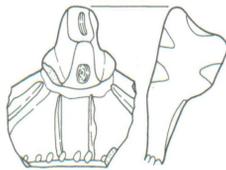
142 8T



143 8T



144 8T



145 7T



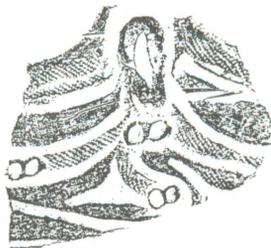
146 8T



147 4T



148 8T



149 8T

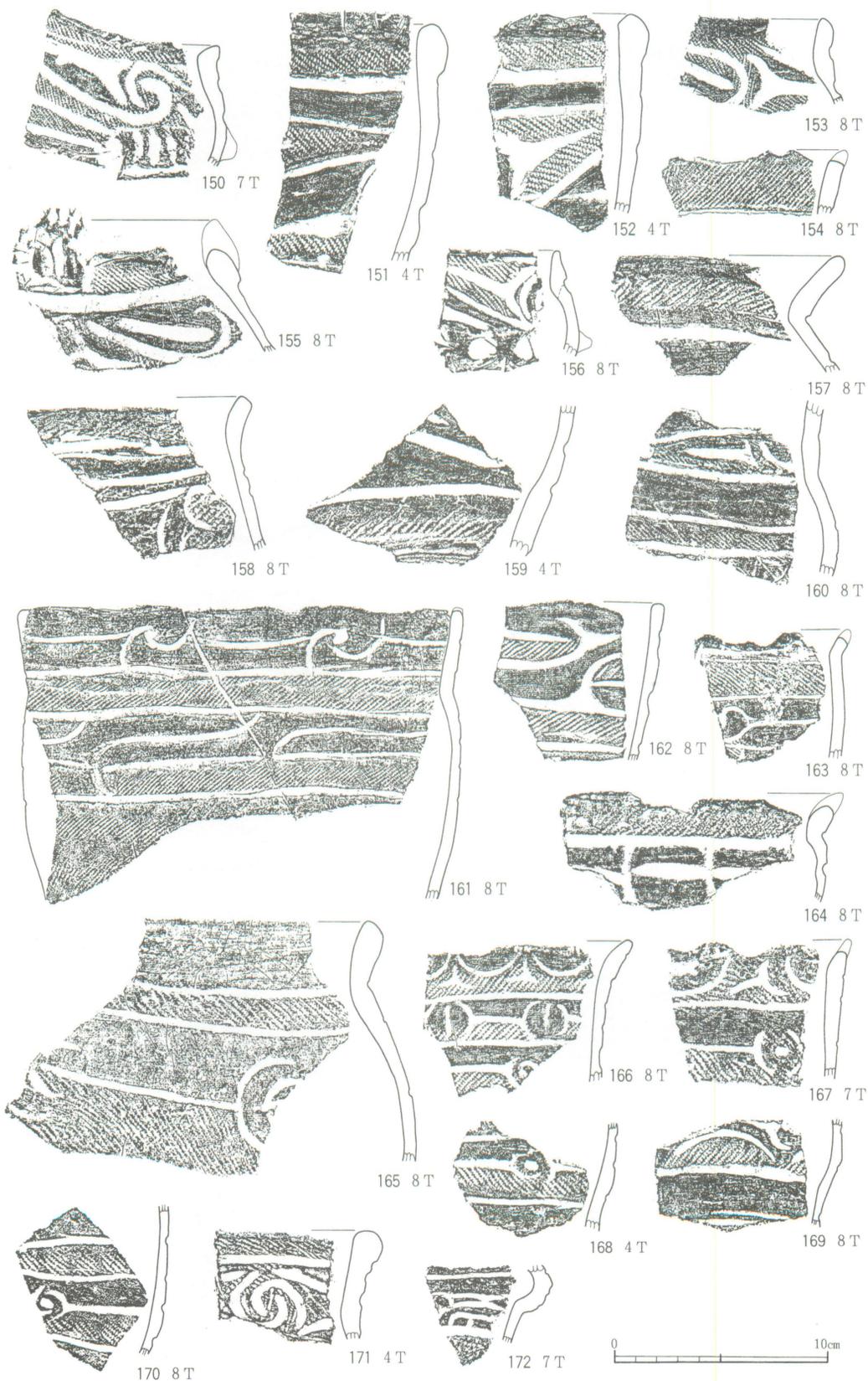


第18図 出土土器(1)

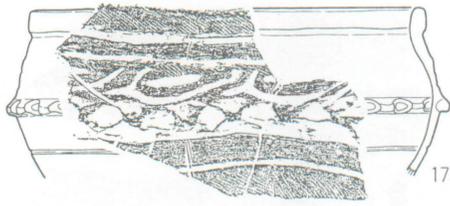
つけるもの、138～140は沈線の入った縦長貼付文をつけるものである。133は帯縄文の間に弧状の沈線の組み合わせと磨消縄文からなる文様を施す。142は折衷的な土器で、平口縁に飾り突起をもつ器形をしながら文様は三角形区画文が配されるものである。貼付文の下の帯縄文が沈線で区画されるだけになり、縄文もほとんど施されない。より後出的な要素を備えた土器である。143・145・146は貼付文のかわりに円形の凹みを中心とした文様構成をとるものである。平口縁ながら、帯縄文の配置は波状口縁土器の三角形区画が移植されている。144は沈線の入った縦長貼付文をモチーフとした波状口縁の波頂部である。147～149は安行的な文様構成のなかに三叉文系の要素が混入しているものである。いずれも安行的な貼付文を基本としながら三叉文や入り組み文も現れている。特に148ではブタの鼻状貼付文をもつ三角形区画と三叉文の組み合わせが、極めて混乱した印象を与える。

三叉文や入り組み文を基本構成とするものを土器を第19図に掲載した。150～160は三叉文を中心とするもの、161～170は入り組み文を中心とするものである。150は安行系土器の貼付文がみられるが、文様構成は完全に三叉文を中心としている。151・152・155は口唇部の帯縄文とナヅリ状の浅い沈線、そして155における突起と貼付文が安行的であるが、胴部は三叉文が主体となっている。154は小型の深鉢で、図の下端部には沈線が施されている。156は口縁部と胴部との境に貼付隆帯が配されるもの。157・158は外反する口縁で、口唇直下に縄文を施す。161は口縁部に入り組み文をもとにしたモチーフを、胴部には大洞系土器の羊歯状文を単純化したモチーフを配する深鉢である。165はやや大型の、口縁が外反する深鉢である。157などとは逆に口唇直下は無文化されている。166～170はいずれも小型の鉢で、口縁部に三叉文、胴部に玉抱き入り組み文を施文する。169は連弧文沈線とも組み合わせられる。171は前浦系土器の、のの字文が崩れたものと思われる。172は羊歯状文をもつ小形の鉢で、大洞BC式である。ただし焼成はやや粗末で、模倣品で在地産と思われる。

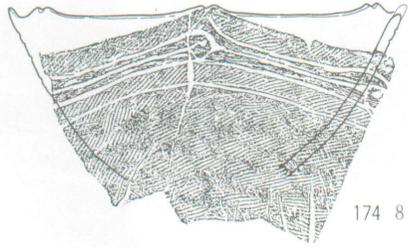
第20図は浅鉢や台付き鉢などを一括した。173は胴部が張りをもつやや深めの浅鉢で、帯縄文と貼付隆帯との間に三叉文が施される。173～179・182・183は浅鉢である。173は安行的な口唇部帯縄文と三叉文や貼付隆帯を組み合わせたもの。174は椀型をした浅鉢で丸底になると思われる。口縁部文様帯の入り組み文は直線的で水平基調である。施文の順序は沈線が先で縄文が後である。176も椀型をした丸底の浅鉢だが、胴部の文様は174より文様帯が広がっており、曲線的である。177は大洞系土器の影響の強い器形をした浅鉢で、内面には赤色顔料の付着がみられる。文様自体は入り組み文を基本としたものである。179は小波状口縁で、口縁部はやや強く外反する。180は注口土器の一部と思われる。胴部半ばの屈曲部分の上側に、三叉文を基本とした磨消縄文が施される。181は台付き鉢で、台の部分には貼付隆帯がみられる。182・183は平底の浅鉢で、胴部の水平沈線を境に182では口縁側、183では底部側に縄文が施される。184は台付き鉢の台の部分で、貼付隆帯と三叉文がみられる。



第19图 出土土器(12)



173 8 T



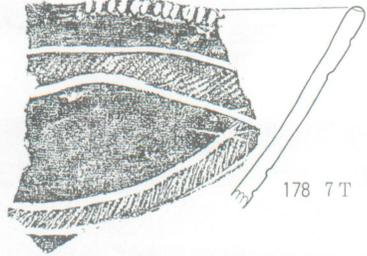
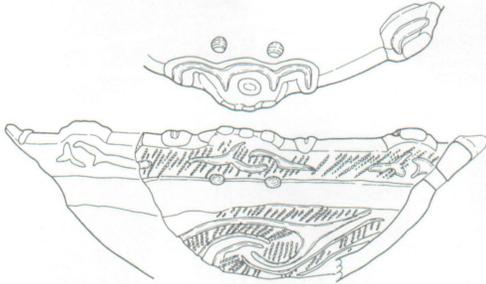
174 8 T



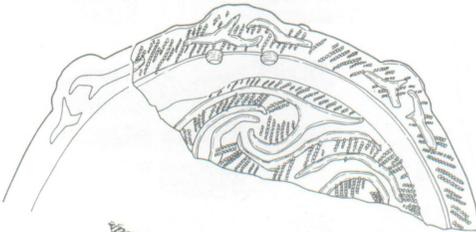
175 8 T



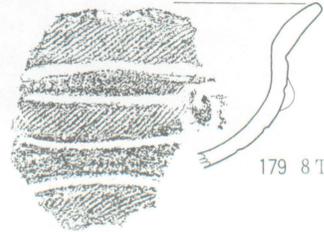
176 8 T-001



178 7 T



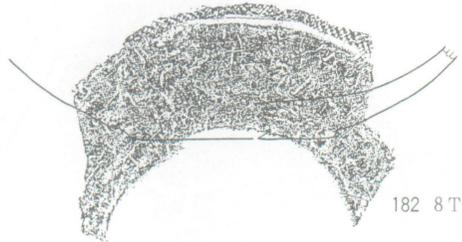
177 7 T



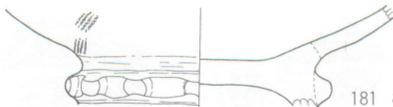
179 8 T



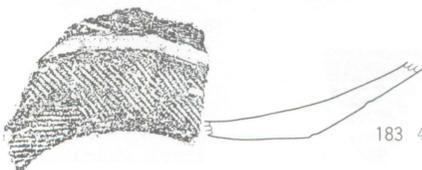
180 8 T



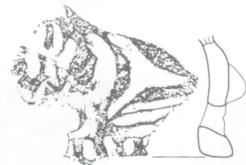
182 8 T



181 8 T



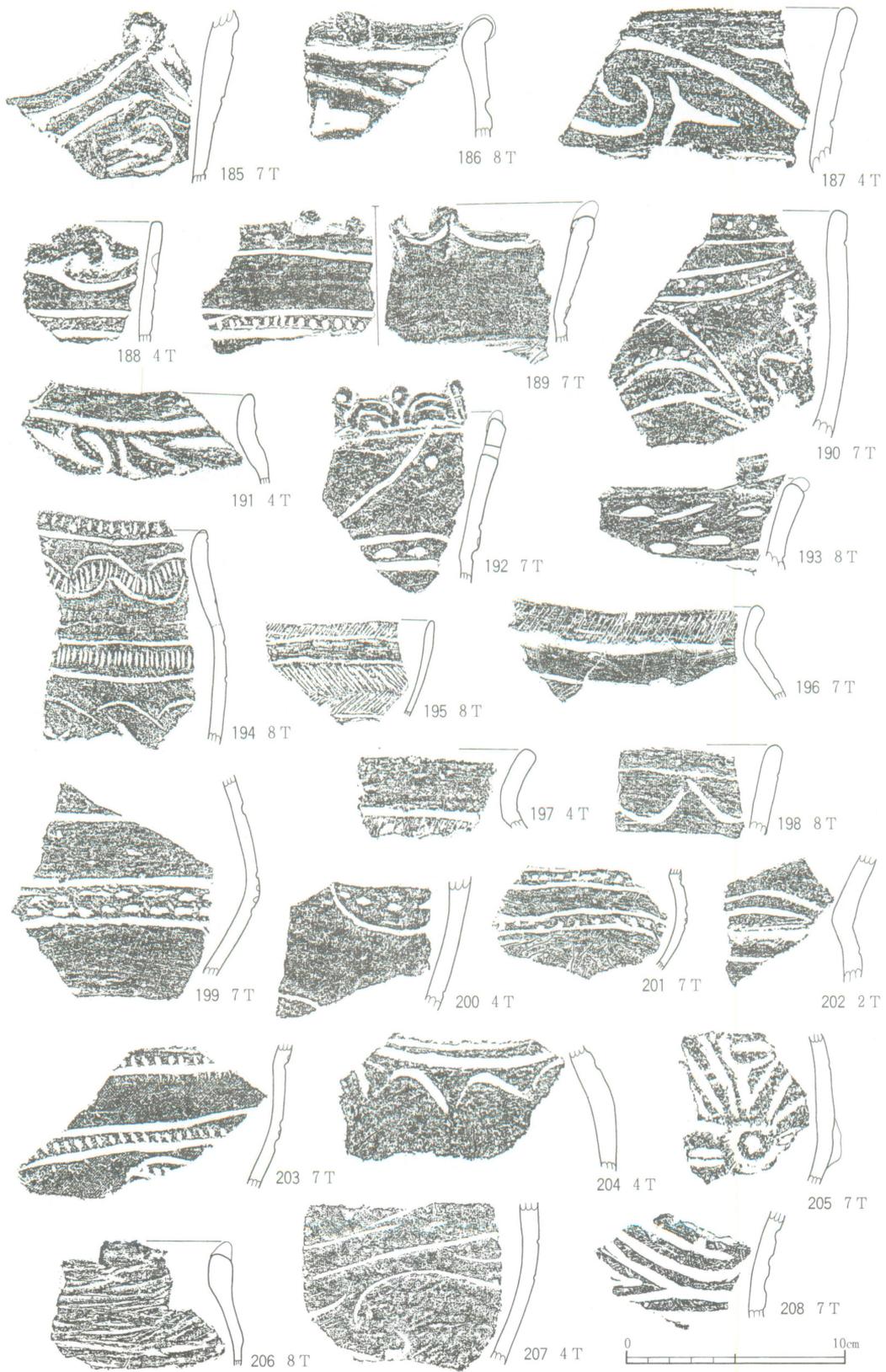
183 4 T



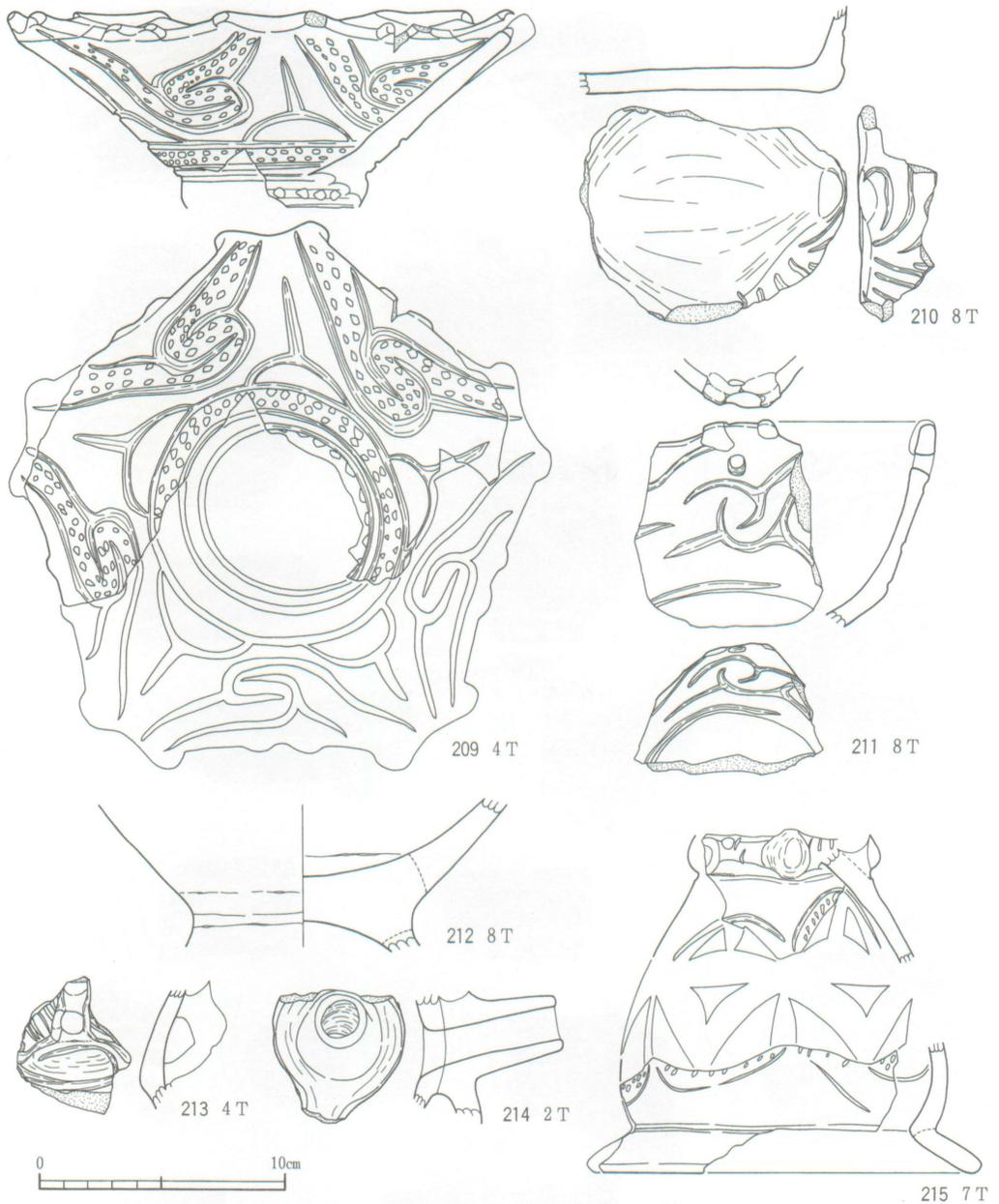
184 8 T



第20图 出土土器(13)



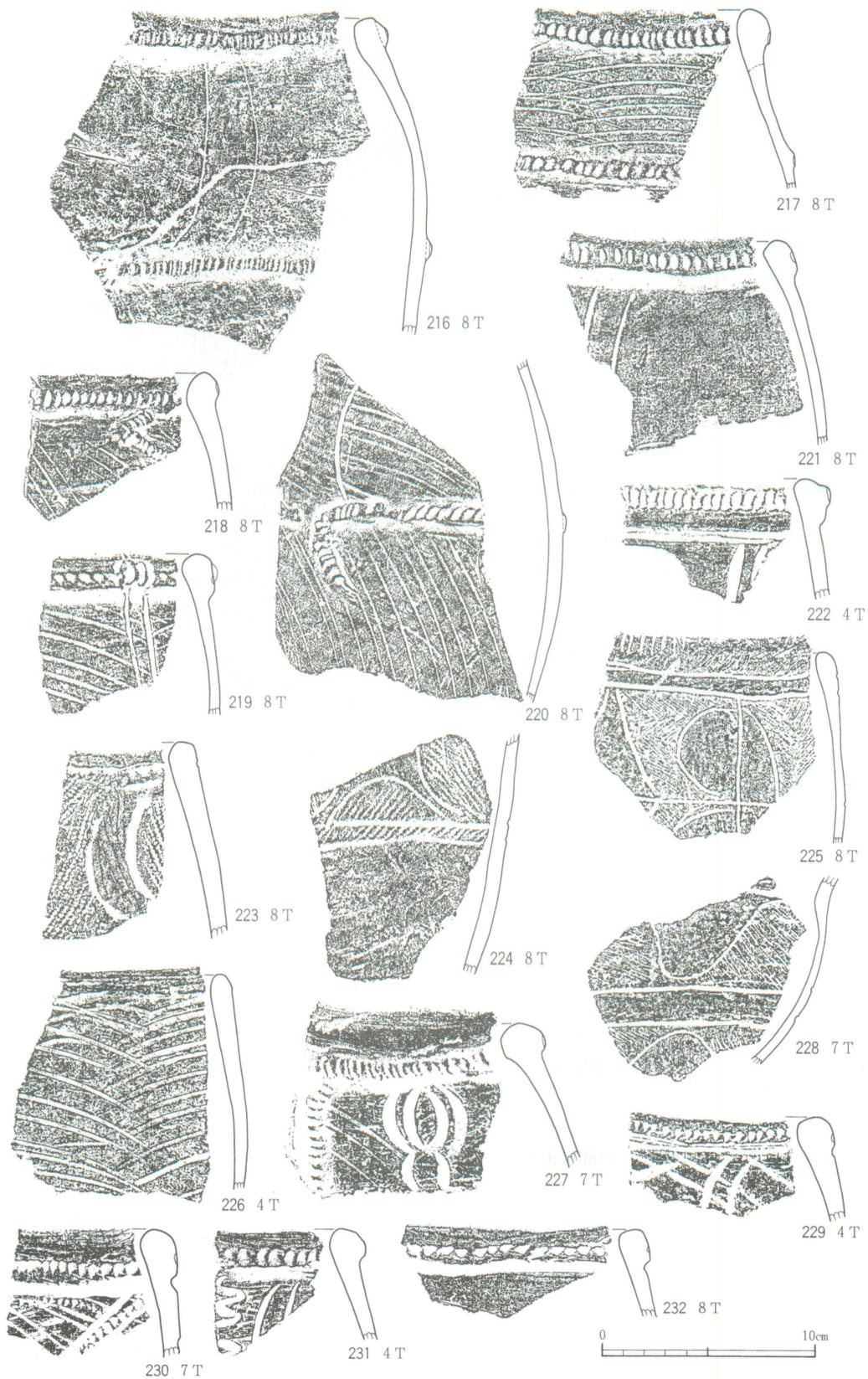
第21图 出土土器(14)



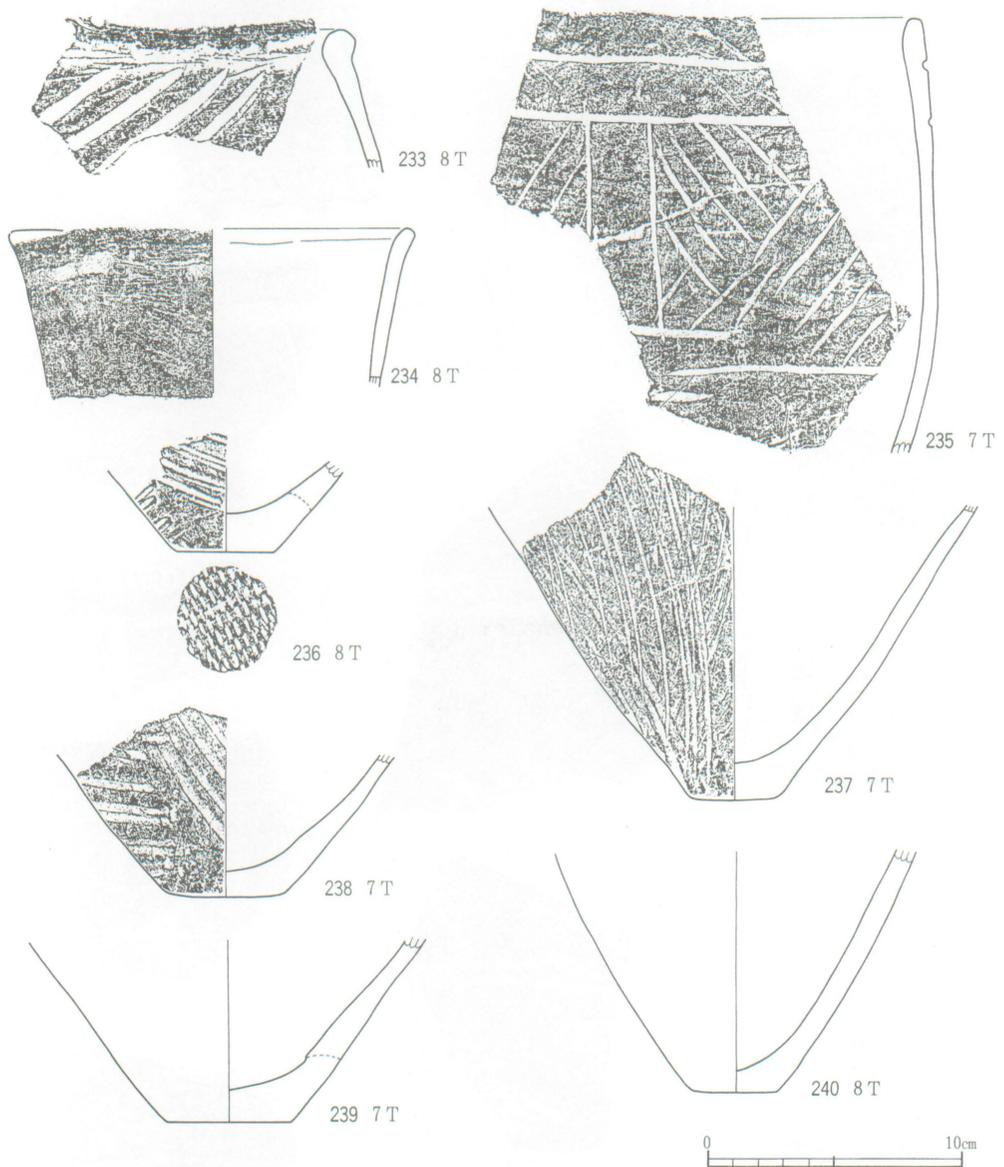
第22図 出土土器(15)

216～226・228は粗製の深鉢である。216～222・226は口唇部と胴部に紐線文を配し、全体に条線を施すもので、紐線文の間に直線ないしは弧状の沈線を施したり、紐線文そのものを縦方向に貼り付けたりする。216は弧状の沈線を2本施すもの。217は2段目の紐線部分に段状の屈曲がある。218・220は紐線を自由に貼り付けていくもの。219にはブタの鼻状貼付文がみられる。221は216と似たような土器であるが、口唇を肥厚させて刻み目を入れるもの。226は紐線文がないもので、姥山系の土器と思われる。223・224は条線のかわりに磨消縄文を用いるものである。225・228は細密沈線を施すものである。

第七群土器（第21・22図・第23図227・229～232・第24図233～235、図版13・14）



第23图 出土土器(16)



第24図 出土土器(17)

185は波状口縁の深鉢で波頂部が欠けている。波頂部の下には円文崩れの沈線がみられ、姥山系土器の影響が強い。186～188・191は三叉文をもつものである。187は図で示した部分の最下部に屈曲があり、胴部にかけてやや膨れる器形をしている。191は縄文がないものの、器形は安行3b式の名残が強い。189・190・192以降は沈線と列点によって構成されるものである。189も口縁部文様帯の下に屈曲があるもので、境の部分に列点で充填された平行沈線を施す。内面には口唇上の突起を結ぶ沈線が施される。190は三叉文崩れの沈線と列点によって構成される。192も189と同様の文様構成をとるもので、内面には貼付瘤もみられる。194は胴部にやや膨らみをもつ小形の鉢で、連弧状および平行沈線を列点状の沈線で充填する。口唇上にはキザミがみられ、また、胴部下半にも連弧状の沈線がみられる。195～197は細沈線が施されるもの。195と

196は同じような器形をした土器であるが、195では細沈線が外反した口縁の口唇側に、196では胴部側に施されている。197は小形の鉢と思われるが、器厚が極めて薄く焼成は良好である。198は連弧状沈線を口縁部に施すもの。199～201・203は平行沈線と列点によって構成されるもの。204は連弧状沈線が胴部に施文されるもの。202・205・207・208は沈線のみ施されるもので、掲載された土器群では最も新しいグループに属する。205は貼付瘤を中心とした文様構成をとるもので、三叉文の残滓がみられる。206は小突起をもつ無文土器の口縁で、ヘラ状工具による横方向のナデが顕著である。

209～215は浅鉢、注口土器その他である。209は三叉文崩れの沈線と列点によって構成された安行3cの台付き鉢の優品である。210・211はよく似た文様構成をもつ浅鉢である。210は底がひし形をしており、革製品の模倣である可能性が高い。211は三叉文の変形した沈線が入るもので、丸底になるものと思われる。212は無文の台付き鉢である。213は注口土器の把手部である。214は注口部で、根本付近には舌状の貼付飾りがみられる。全体に極めて丁寧な調整が施される。215は台付き鉢の台部である。中間部が抜けているが、同一個体とみなして復元した。器面は沈線と列点を基本として、三角形の透かしを組み合わせる上下二段組の文様構成をとる。

227・229～235は粗製土器である。227は口唇に紐線文が残るが、太い沈線を主体とした文様が中心となっている。229～232は口唇の肥厚部分は列点文に置き換えられ、条線も少なくなってくる。233は列点文もみられなくなり、肥厚した口唇と沈線のみになる。235では口唇も肥厚せず、ただ幾何学的な沈線の区画のみになる。234は無文土器である。

最後に、後期も含めた安行式の粗製土器の底部を一括する（第24図236～240）。236～238は胴部に条線が施されるもので、236では底部にアンペラの圧痕がみられる。239・240は無文のものである。

(2) 出土土器の傾向

出土した土器について、前回1980・1981年調査時の資料と比較しながら時期ごとにその傾向について概観したい。まず前期では、前回良好な資料が多く出土した関山式土器が、今回は全く出土しなかった。関山式に限らず、今回の調査では前期の土器は前回に比べ出土数が少ない。トレンチ設定にあたってはなるべく前回調査した地点から離れるようにしたが、結果としてそれが前期の出土地点からはずれたのであろう。ただし、前回検出されなかった諸磯c式が、7Tでやや多く出土しているのは注目される。

中期では特に前半に興味深い資料が出土している。前回やや少なかった阿玉台式土器も多数出土した。また、加曽利E式も前回少なかったE I式が多数出土した。その他、勝坂系土器の影響の顕著な資料も多く、地理的に見ても西関東系の土器の影響が強いことをうかがい知ることができよう。前回まとまった資料が出土したE IV式は、今回は極めて少なかった。

後期では、やはり前回まとまった資料が出土していた称名寺式および堀之内1式が少なかった。

たのが目立った。称名寺式は図示したのがほとんど唯一といえるもの、堀之内1式も前回多かった古い段階に属するものが、今回は少なかった。かわりに堀之内2式は比較的資料がそろっている。加曽利B式土器は前回はB1式およびB3式土器が多かったのに対し、今回はB2式の方が目立つという違いはあるものの、おおむね各時期まとまって出土している。後期安行式は前回に比べると量も多いが、前回と同様安行1式に比べ安行2式が少ないという傾向が見られる。

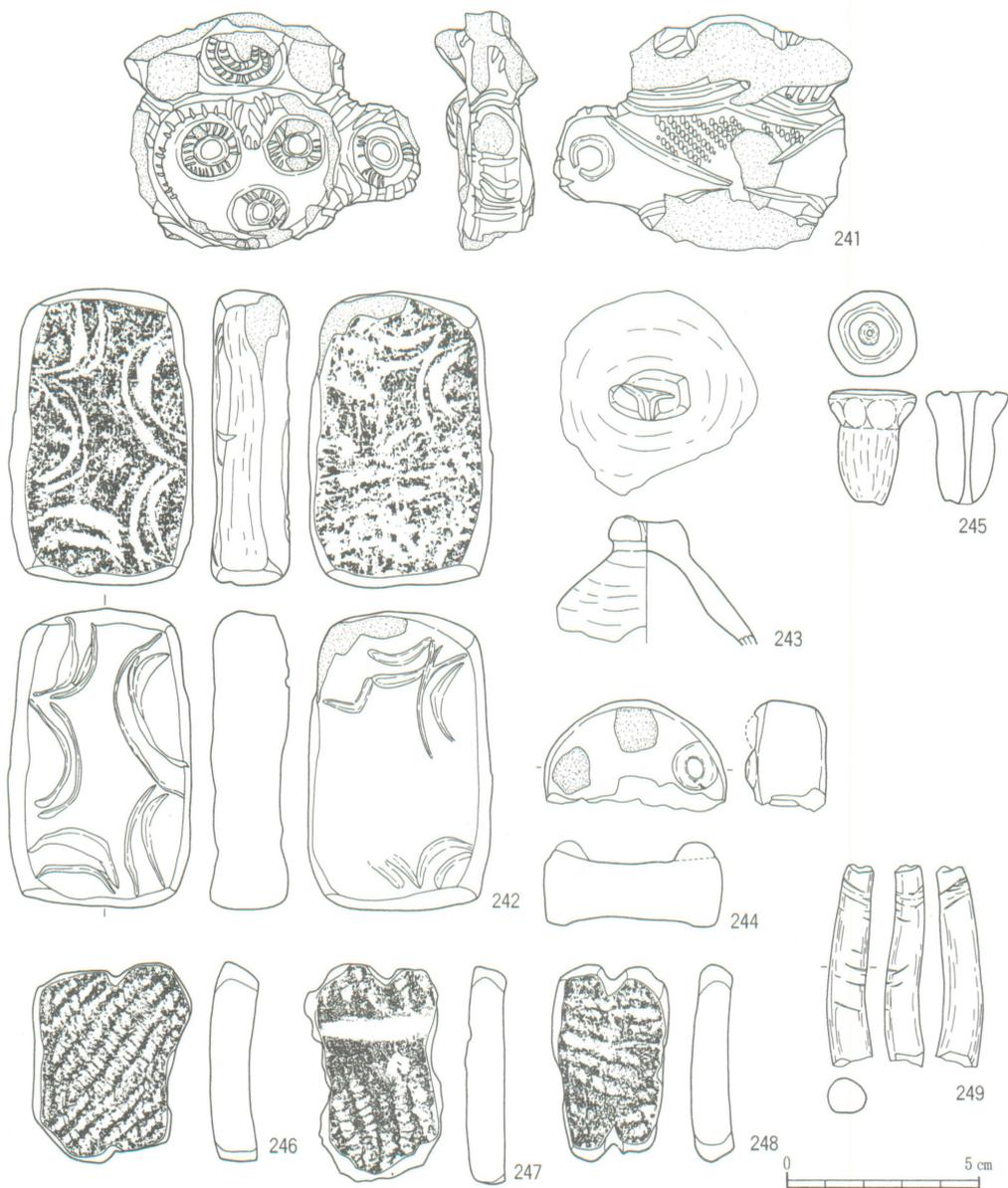
東金野井貝塚が最も充実した資料を提供しているのは前回も今回も晩期であるが、出土資料の傾向にはかなりの違いが見られる。前回少なかった安行3a・3b式は今回非常に多く出土している。また、前はどちらかというと姥山系の土器が多かったのに対し、今回は三角形区画文を中心とした、晩期安行式の伝統的な文様をもつ土器が多く、姥山系土器はどちらかというとき体的な存在となっている。その一方で前回良好な資料が多量に出土した安行3d式は、今回はやや少なめである。

以上、極めて簡単に土器について述べてきたが、東西関東の接点にあるという東金野井貝塚の地理的条件を、土器形式の上からもうかがい知ることができるように思われる。各時期ごとに見ていくと、例えば中期は東関東の文化圏に位置づけられるが、晩期には意外なほど西関東の伝統的な安行系土器を主体とし、東関東系の土器が客体的な存在となるように、時期によってかなり性格が異なっているのが分かる。東金野井貝塚の土器のこのような性格は、遺跡の成立と変遷およびそこで生活した縄文人の活動状況を物語っていると言えよう。

2. 土製品、骨角器 (第25図、表2・3、図版14)

今回の調査で出土した土製品は極めて少ない。特に、土錘や土器片錘の類は図示したものがほとんど全てである。骨角器にいたっては全く出土せず、加工痕のあるものさえ今回図示した一点のみしかみられなかった。

241はみみずく土偶の頭部である。裏面は斜行する沈線によるひし形の区画をRL縄文で充填している。安行3a式に属するものと考えられる。242は土版である。二本一組の沈線を連弧状に施文する。裏面にも同様の文様がみられるが、もともと調整が雑なためはっきりと確認できない。243は蓋状土製品である。つまみ部分には三叉文状のキザミがみられる。244は耳飾りである。周縁に貼瘤をめぐらす。245は耳栓である。通常みられるものとやや形が違って、ペンのキャップのような形態をしている。中心に穿孔がなされ、平端面には沈線が円形に施文される。246～248は土器片錘である。時期の判別は難しいが、おそらく中・後期のものと思われる。249は今回の調査で出土した唯一の骨角器で、加工痕のある鹿の骨である。小さい切り傷状の加工痕が図の上側を中心にして多数みられる。



第25図 出土土製品・骨角器

No.	出土地点	種別	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	時期
241	7 T	土偶頭部	(58.8)	(77.2)	(20.8)	81.06	安行3 a
242	2 T	土版	74.4	48.8	20.4	104.69	晩期前半
243	7 T	蓋状土製品	(50.8)	(52.0)	(31.0)	24.76	晩期前半
244	4 T	耳飾り	(27.6)	(47.8)	(21.0)	26.55	晩期前半
245	8 T	耳栓	28.8	22.8	21.6	9.23	晩期前半
246	2 T	土器片錘	50.4	42.0	11.2	31.37	中期
247	2 T	土器片錘	54.8	36.0	10.4	26.37	中期
248	7 T	土器片錘	49.6	30.8	10.2	20.74	後期

表2 土製品属性表

No.	出土地点	種別	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
249	8 T	器種不明加工品	鹿骨	(50.0)	12.4	9.6	3.34

表3 骨角器属性表

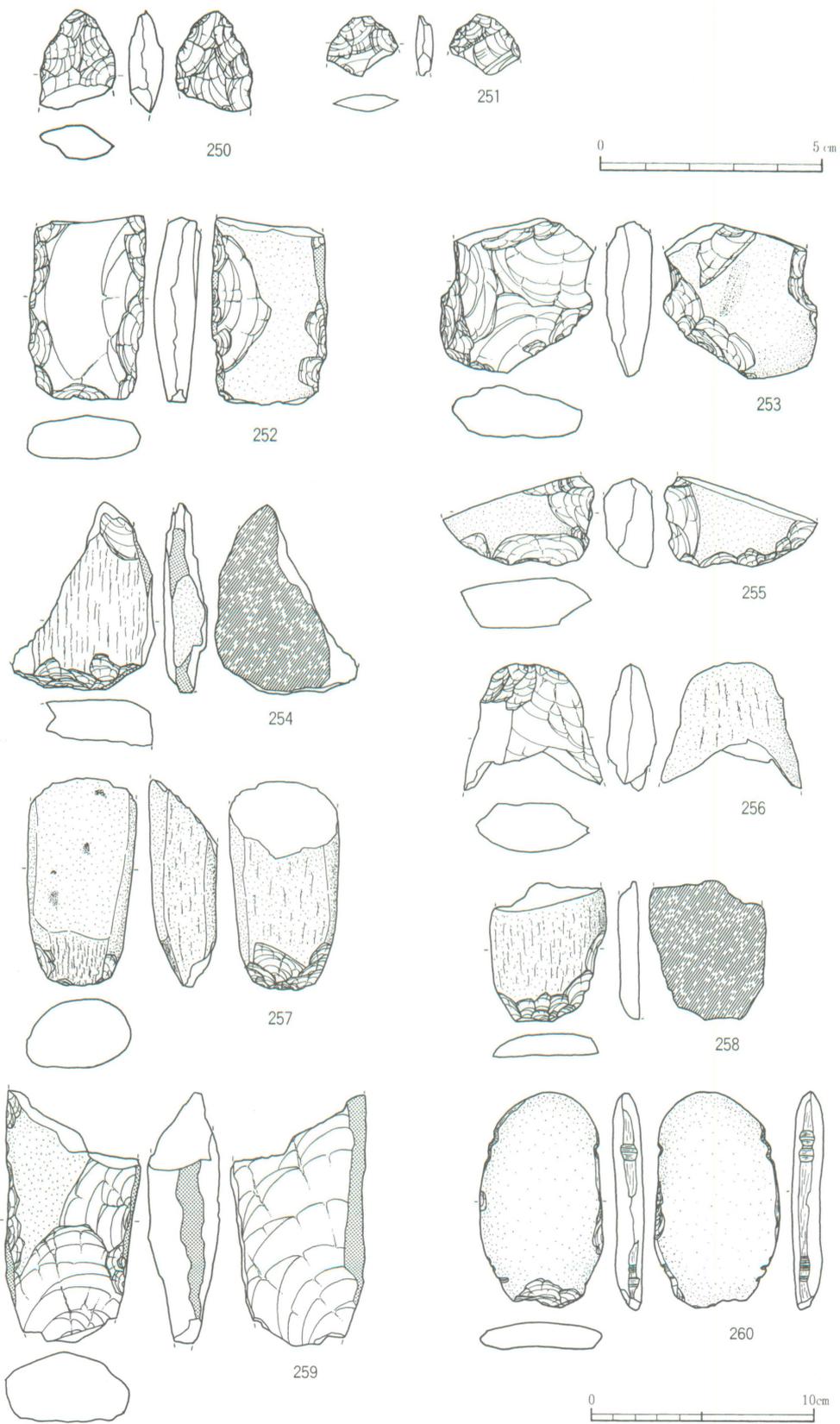
3. 石器 (第26・27図、表4、図版15)

今回の調査では、石器もさほど多く出土しなかった。特に石鏃は図示したのがほとんど全てである。そのかわり石皿等はかなり多く、いちいちとり上げなかったが現地ではかなり地表面に散布しているのが観察できる。

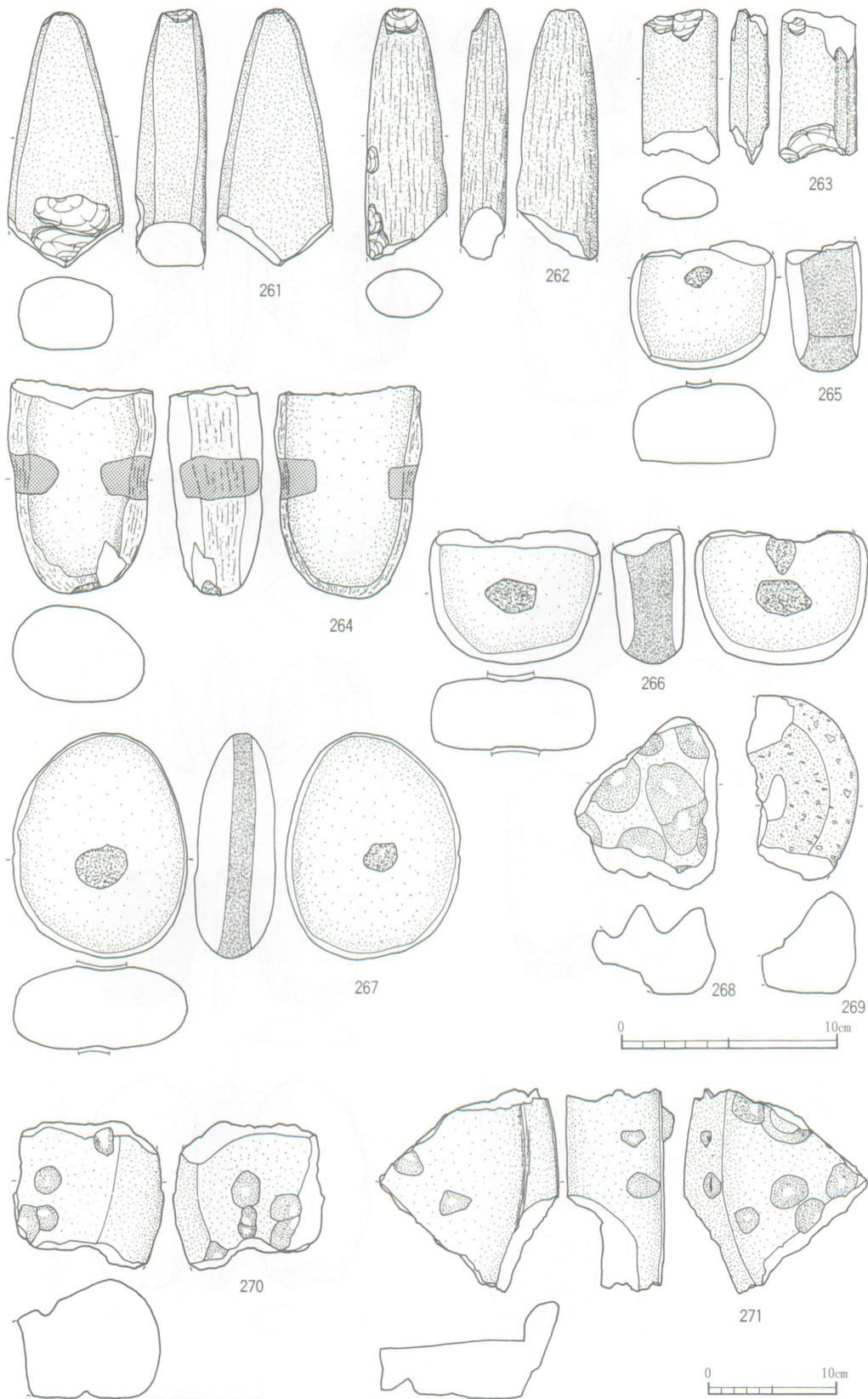
250・251は石鏃である。いずれも基部を欠損している。252～260は打製石斧である。これらも欠損しているものが多い。252は撥型、253は分銅型だったと思われる。254・258は節理割れを起こしているため、裏面は残存していない。256は基部のみが残存しているもの。257にみられる片面の著しい擦痕は二次的なもの（使用によるもの）で、制作におけるものではない。259は両側縁部の磨耗痕が顕著である。先端部が欠損している。260は平たい石の周縁を研磨し、2カ所ないしは3カ所一組の溝状のキザミを入れているもので、制作当初は別な用途に使用されていたことも考えられる。261～263は石剣である。これらも全て折られている。263の両端部にみられる剥離痕は、折られた後につけられたものである。264は敲石である。両縁部に柄のようなものを装着していたと思われる磨耗痕がかなり顕著にみられる。石斧の転用である可能性が強い。265～267は磨石である。周縁部にかなり顕著に擦痕がみられるほか、中心には敲打痕もみられる。268・269は凹石である。268はほとんど平坦面がないくらいに使い込まれている。269は軽石を使用している。270・271は石皿転用凹石である。270は大型で円形の河原石などを使用したものと思われ、中心と思われる方向に向かって擦痕が顕著である。271は石皿としては異例なほど入念な加工がなされたもので、周縁部が切り立つように削りだされ、中央部は平坦に磨かれている。下側には脚状の突起もみられる。全体の形状はおそらく円形になるものと思われる。

No	出土地点	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
250	7 T	石鏃	チャート	(21.6)	(17.2)	8.0	2.60
251	表面採集	石鏃	黒曜石	(13.2)	(16.0)	3.8	0.83
252	7 T	打製石斧	凝灰岩	(78.4)	(52.0)	(19.2)	109.34
253	4 T	打製石斧	安山岩	(65.6)	(69.2)	(20.8)	115.96
254	2 T	打製石斧	雲母片岩	(69.6)	(64.8)	(19.6)	99.22
255	8 T	打製石斧	安山岩	(38.4)	(68.8)	(21.6)	66.95
256	7 T	打製石斧	頁岩	(54.0)	(62.8)	(22.4)	60.21
257	7 T	打製石斧	雲母片岩	(88.0)	(69.6)	(30.4)	183.57
258	7 T	打製石斧	雲母片岩	(58.8)	(53.2)	(9.2)	42.45
259	2 T	打製石斧	砂岩	(110.8)	(61.2)	(32.0)	238.17
260	8 T	打製石斧	砂岩	94.0	56.0	13.6	103.26
261	8 T	石剣	砂岩	(109.6)	(53.6)	(32.8)	276.78
262	4 T	石剣	雲母片岩	(108.4)	(38.4)	(21.0)	133.73
263	8 T	石剣	雲母片岩	(66.2)	(35.8)	(18.4)	66.47
264	4 T	敲石	雲母片岩	(89.6)	(69.0)	(44.2)	409.40
265	7 T	磨石	砂岩	(55.7)	(67.6)	(34.8)	210.69
266	7 T	磨石	砂岩	(57.2)	(80.4)	(33.6)	262.26
267	8 T	磨石	砂岩	96.8	81.2	33.2	443.57
268	7 T	凹石	安山岩				173.98
269	7 T	凹石	軽石				83.87
270	2 T	石皿	安山岩				912.01
271	2 T	石皿	安山岩				461.68

表4 石器属性表



第26图 出土石器(1)



第27图 出土石器(2)

4. 動物遺存体

確認調査という性格上、採取した動物遺存体は多くはないが、それにも関わらず多種多様な動物遺存体が検出され、前回の知見同様に本貝塚には多くの動物遺存体が存在することが改めて認識された。ただし今回は中間報告のみにとどめ、本格的な分析結果は将来の課題としたい。なお、種同定とその知見については、軟体動物については当文化財センター 西野雅人が行い、脊椎動物を千葉県立中央博物館 小宮 孟氏にお願いした。

(1) 採取の方法と同定結果 (表5)

今回同定されたのは、発掘によるものおよび2T、7T、8Tから採取した貝層のコラムサンプルより得られた資料である。貝層には本格的には手を付けなかったため、貝類以外の動物遺存体のうち大型のもののはほとんどは、貝層直上の包含層などから出土したものである。これらの獣骨類については、トレンチの区域ごとに一括して採取した。ただし8Tについては、表土中からも多量の獣骨類が検出されたため、それらも同様に採取している。

1. 貝類

腹足綱 GASTROPODA

イボキサゴ	<i>Umbonium (suchium) moniliferum</i>
オオタニシ	<i>Cipangopaludina Japonica</i>
カワニナ	<i>Semisulcospira libertina</i>
ウミニナ属	<i>Btillaria</i> sp.
カワアイガイ	<i>Cerithideopsislla djadjariensis</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
腹足綱種不明	Gen. & sp. indet.

二枚貝綱 BIVALVIVA

ツノガイ	<i>Antalis weinkauffi</i>
サルボウガイ	<i>Scapharca suberenata</i>
ハイガイ	<i>Tegillarca geana</i>
フネガイ科種不明	Arcidae gen. & sp. indet.
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i>
イシガイ科種不明	Unionidae gen. & sp. indet.
シオフキガイ	<i>Mactra veneriformis</i>
シオサザナミガイ科種不明	Psammobiidae gen. & sp. indet.
マテガイ	<i>Sorens strictus</i>
ヤマトシジミ	<i>Cabicura japonica</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
カガミガイ	<i>Dosinorbis (Phacosona) japonicus</i>
オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>
二枚貝綱種不明	Gen. & sp. indet.

2. 魚類

軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

軟骨魚綱種不明 Gen. & sp. indet.

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

真骨類 TELEOSTEI

クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.
スズキ属	<i>Lateplabrax</i> sp.
カタクチイワシ	<i>Engraulis japonica</i>
コイ	<i>Cyprinus carpio</i>
ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>
フグ科種不明	Tetraodontidae gen. & sp. indet.

3. 哺乳類

齧歯目 RODENTIA

ネズミ科種不明 Muridae gen. & sp. indet.

偶蹄目 ARTIODACTYLA

イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
シカ	<i>cervus nippon</i>

表5 動物遺存体種名一覧

(2) 動物遺存体の概要

今回の報告は、あくまで資料全体のうちの一部であり、同定を行ったものについても数的処理が行われているのは貝類のみである。

貝類

腹足綱6種、二枚貝綱16種が同定された。種類は多種多様であるが、後で述べるように圧倒的多数をヤマトシジミが占めている。

脊椎動物

10種が同定されている。今回の資料では前回と同様コイ、ウナギなど淡水産の魚が多量に検出された。

以上の分析結果から考えると、本遺跡の貝層が形成された当時の奥東京湾は、砂泥質の土が堆積した汽水性の内湾ないしは潟湖であったと考えられる。直良信夫は「・・・当時此の近傍には陸水の発達が著しく、比較的近く迄迫って来ていた海は、干満潮線の開きの大きい砂泥質のものであったことが考えられる。」というふうに、東金野井貝塚周辺の古環境を復元しているが、今回の分析の結果もおおむねこれを裏付けるものといつてよい。

5. 貝サンプル

今回は面状貝層に設定したトレンチ(2T、7T、8T)から、全部で3カ所計25カットのサンプルを採取した。いずれも後期加曽利B式期のものと思われる。分析は1990年度に千葉市誉田高田貝塚で行った方法によった(出口 1991)。

(1) 採取方法(表6)

資料の採取は、全て垂直コラムを基本とした。平面上のサイズは若干異なっているが、1カットあたりの容量は若干の誤差はあるものの基本的にすべて同じである。2Tは貝層の上面がかなり起伏が激しかったため、清掃などにより若干目減りしている。また7Tでは、薄い貝層の下はわずかに破碎貝の混入する土層になっていたが、破碎貝が混入しなくなるまで採取を続けたため、この部分のカットは貝自体の量は極端に少なくなっている。

(2) 貝類の組成比率(表7・8・9)

全体としてヤマトシジミが9割以上という圧倒的多数を占めている。そのなかで細かい部分をみていくと、2Tと8Tが似たような傾向を示すのに対し、7Tは若干異なる様相を示している。

2T・8T 個体数、重量ともヤマトシジミが98%以上を占めている。とくに2Tでは99.5%とほとんど全てといつてもよいぐらいである。ほかにはマガキ、ハイガイ、オキシジミ、アサリなど鹹水産の貝も若干みられる。

7T ここもヤマトシジミが圧倒的多数を占めるが、その割合は個体数比で97%、重量比では

	採取法・量	時期	備考
2T	40×40×5 cm 垂直コラム×9カット	加曽利B～ 曾谷	獣骨・中型魚の骨が多い。焼土層では破 砕貝が多い。
7T	50×32×5 cm 垂直コラム×7カット	堀之内～ 加曽利B	3カット目までと4カット目以降とは 時期が分かれる。
8T	50×32×5 cm 垂直コラム×9カット	加曽利B	完形の貝が多い。魚骨も多いがほとん どが破片である。

表6 貝サンプル一覧

93.2%となり、他のサンプルに比べ若干少ない。かわりにハマグリが個体数比で1.9%、重量比で5.7%を占めているのが目を引く。

(3) 貝類の計測値 (表7・8・9)

すでに述べたように今回採取した貝サンプルの内訳は、ヤマトシジミがほとんどである。そこでヤマトシジミの殻長の計測値については各トレンチごとの組成比率とあわせて掲載し、それ以外の二枚貝綱および腹足綱についてはまとめて7Tのページに掲載した。ただし、ヤマトシジミの計測値は、各カットから任意に100個抽出して行った。100個に満たないカットは、全ての資料について計測した。度数分布表の作成については、マイクロソフト株式会社の表計算ソフト、Microsoft Excel for Windows Ver.4.0のアドインマクロを使用した。

この計測値について、特にヤマトシジミの殻長を中心に簡単に見てみたい。度数分布をもとに算出したヤマトシジミの殻長の最頻値は、2Tのサンプルの合計は21.2mm、7Tは30.4mm、8Tは24.0mmで、7Tが突出しているのが観察される。表だけでは分かりにくいのが、データ区間ごとの度数の割合も2T、8Tでは最頻値付近を最大として、そこから離れるにしたがって漸減していくのに対し、7Tでは22.5～30.0mmが連続したピークを形成している。このようなことになる要因については、時期の違い、季節の違いの2つの点から考察できようが、それを実証するにはなお分析を進めていく必要がある。7Tと8Tのサンプルは、平面上は同一である面状貝層の、それぞれかなり近接した地点から採取したものだが、貝の組成の傾向など基本的には同質であるものの、その内容・性格は微妙に異なっていることがうかがえる。

以上の結果は、東金野井貝塚の広大な貝層のごく一部だけを対象とした分析であるが、それでも縄文人の生業活動を知るための豊富な情報と、研究を進める上で考察すべきさまざまな問題が存在することが明らかになった。

2 T組成比率

	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8					
	個体数 (%)	重量 g (%)																		
イボキサ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
カワニナ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
ウミアイ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
アワニシ	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	1.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
腹足綱種不明	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
ツツノ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
ハネガイ	1	2.4	3	14.8	3	9.9	4	19.4	1	5.4	0.2	0	0	0.1	0.0	0.0				
イネガイ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0				
マツカサ	1	4.0	2	3.7	1	3.8	0	6.2	1	37.1	1.7	0	0	1.1	0.1	0.0				
マイシ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
イシ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
シオアト	1250	99.7	2565.8	99.6	1198	99.6	2587.8	99.5	1226	99.5	2643.3	99.7	1306	99.1	5063.6	99.4	1027	99.6		
ヤマ	2	0.2	3.7	0.1	2	0.2	6.2	0.2	3	0.2	6.0	0.2	5	11.3	0.2	1	0.1	6.6	0.3	
ホオ	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
オオ	1	0.1	0.3	0.0	1	0.1	5.9	0.2	1	0.1	8.0	0.2	2	8.0	0.2	1	0.1	6.6	0.3	
オオ	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	0.1	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	
オオ	0	0.0	1.0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	
二枚貝綱種不明	1	0.1	0.1	0.0	1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
二枚貝綱種不明	1	0.1	0.1	0.0	1	0.1	0.1	0.0	3	0.2	0.2	0.0	0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.1	0.0	
二枚貝綱種不明	0	0.0	0.0	0.0	0	0.0	2.3	0.1	0	0.0	8.7	0.2	0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
合計	1254	100.0	2571.6	100.0	1203	100.0	2601.4	100.0	1318	100.0	5092.7	100.0	1031	100.0	2239.9	100.0	833	100.0	2407.2	100.0

2 Tヤマトシジミ計測値分布

	Cut 9		合計		Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		Cut 8		合計		平均
	個体数 (%)	重量 g (%)	平均																				
イボキサ	0.0	0.0	1	0.0	0.1	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0.4
カワニナ	0.0	0.0	2	0.0	0.6	0.0	4	1	2	5	1	5	2	8	1	4	4	6	8	36	4.0	4.0	
ウミアイ	0.0	0.0	3	0.0	2.4	0.0	6	7	12	11	16	15	16	16	14	9	13	10	98	10.9	10.9	10.9	
アワニシ	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	19	17	17	17	16	29	24	25	18	24	24	19	184	20.4	20.4	20.4	
腹足綱種不明	0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	21	21	23	19	24	19	24	21	21	23	30	29	211	23.4	23.4	23.4	
ツツノ	1	0.2	14	0.2	59.5	0.3	27	17	20	19	8	8	22	21	11	11	21	21	166	18.4	18.4	18.4	
ハネガイ	0	0.0	0	0.0	1.4	0.0	12	14	9	13	13	8	9	9	8	9	9	8	95	10.6	10.6	10.6	
マツカサ	0	0.0	7	0.1	82.7	0.4	9	12	4	8	1	7	7	6	3	5	3	5	55	6.1	6.1	6.1	
マイシ	0	0.0	1	0.0	0.9	0.0	1	6	6	3	2	2	2	2	6	3	1	2	30	3.3	3.3	3.3	
イシ	0	0.0	1	0.0	1.5	0.0	1	1	1	1	7	2	1	1	0	1	1	0	13	1.4	1.4	1.4	
シオアト	0	0.0	1	0.0	3.9	0.0	0	2	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0.9	0.9	0.9	
ヤマ	527	99.8	911.8	99.5	21939.0	99.5	8527	99.5	21939.0	99.5	8527	99.5	8527	99.5	8527	99.5	8527	99.5	8527	99.5	8527	99.5	8527
ホオ	1	0.2	0.4	0.0	1.5	0.0	6	0.1	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
オオ	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
オオ	0	0.0	2.9	0.0	15.5	0.1	9	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
二枚貝綱種不明	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
二枚貝綱種不明	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	528	100.0	916.4	100.0	8566	100.0	22045.2	100.0	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	900	100.0	100.0	100.0	100.0

※データ区間の単位はmm

注 割合 (%) は小数点以下第 2 位で四捨五入した。

表 7 貝類組成比率・計測値分布(1)

7T貝類組成比率

	Cut 1		Cut 2		Cut 3		Cut 4		Cut 5		Cut 6		Cut 7		合計	
	個体数 (%)	重量 g (%)														
オオタニシ	2	0.2	6.3	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2	0.2
ワニシ	3	0.4	5.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3	0.3
腹足綱種不明	0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
フネガイイ科	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
フネガイイ科	2	0.2	28.1	0.7	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
マテガイイ	2	0.2	0.7	0.0	1	0.7	0.2	0.0	0.0	0.3	0.6	0	0.2	1.0	5	0.4
ヤマトシジミ	794	97.2	3692.5	93.1	145	94.8	549.0	90.7	64	97.0	216.5	97.4	51	98.1	1081	97.0
ハオノガイイ	14	1.7	230.6	5.8	6	3.9	52.5	8.7	1	1.3	3.2	1.4	0.0	0.0	21	1.9
オオノガイイ	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
二枚貝綱同定不能	0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0.0
合計	817	100.0	3966.0	100.0	153	100.0	605.5	100.0	66	100.0	222.3	100.0	52	100.0	142.2	100.0

7Tヤマトシジミ計測値分布

データ区間	Cut 1	Cut 2	Cut 3	Cut 4	Cut 5	Cut 6	合計	平均
10.0 ~	0	0	0	0	0	0	0	0.0
12.5 ~	0	1	1	0	0	0	2	0.8
15.0 ~	0	2	0	0	0	2	4	1.7
17.5 ~	4	3	1	2	0	0	10	4.2
20.0 ~	5	7	0	2	0	0	14	5.9
22.5 ~	24	10	4	1	3	0	42	17.7
25.0 ~	17	17	5	3	0	2	44	18.6
27.5 ~	19	17	4	0	0	0	40	16.9
30.0 ~	18	17	8	1	2	0	46	19.4
32.5 ~	7	9	3	1	0	0	20	8.4
35.0 ~	6	5	3	1	0	0	15	6.3
37.5 ~	0	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	100	88	29	11	5	4	237	100.0

腹足綱計測値分布

データ区間	イボキヤゴ	カワニナ	オオタニシ	カワアマガイ
7.5 ~	1			
10.0 ~				
12.5 ~				
15.0 ~				
17.5 ~				
20.0 ~				
22.5 ~				
25.0 ~				
27.5 ~				
30.0 ~				
32.5 ~				
35.0 ~				
37.5 ~				
40.0 ~				
42.5 ~				
合計	1	2	1	2

二枚貝綱計測値分布

データ区間	ハマガイ(左)	ホキジミ(右)	ハマガイ(右)
17.5 ~			
20.0 ~			
22.5 ~			
25.0 ~			
27.5 ~			
30.0 ~			
32.5 ~			
35.0 ~			
37.5 ~			
40.0 ~			
42.5 ~			
45.0 ~			
47.5 ~			
50.0 ~			
52.5 ~			
55.0 ~			
57.5 ~			
60.0 ~			
62.5 ~			
合計	10	7	17

表 8 貝類組成比率・計測値分布(2)

IV ま と め

1. 貝層の分布および形成時期について

貝層の分布の把握はボーリング調査という手段によった。したがって地中の貝層の堆積状況についての正確な情報を必ずしも十分に得たとはいえないし、また、耕作中の畑が多かったため、ボーリングについても十分に行えたとはいえない。そのことを前提とした上で、ボーリング調査によって判明した貝層の分布について考察したい。

今回の調査においては、これまで確認されていた馬蹄形の貝層のほかに、その内側にも貝層が確認された。ボーリングを行ったときの手応えとしては、貝殻が密集した純貝層というよりは、むしろ混貝土層に近い感覚であった。堆積もそれほど厚くはなかったが、貝層の下はプライマリーな土層の堆積と思われた。判断が難しいところであったが、最終的には生きた貝層として堆積範囲に含めた。こうして得られた今回の成果と1981年の野田市教育委員会による調査の成果と比較してみると、面状貝層の北西側にかなりの違いがみられる。その時一体のものとして捉えられた貝層は、今回は二ヶ所に分かれるものとして確認された。ただし、2Tおよび3Tでのソフトローム上の包含層の厚い堆積から推測すると、長さ1mのボーリングステッキでは探知しきれないほど貝層の上に包含層が厚く堆積している可能性が強い。しかも、この部分は地上に耕作物があつたため、実質的には70cm程度しか探査できなかった。したがって、前回と今回の調査での貝層範囲の相違は、貝層上面の深さの違いが現れたものと考えられる。このような深さの違いが見られた要因について、今のところ、次の2つが考えられる。1つは遺構の存在する部分とそうでない部分との違いが現れたということである。2Tにおいては深さ30cmで捉えられた面状貝層も、住居跡内に堆積している部分では地表から1m近くまで落ち込んでおり、その上に厚い包含層が堆積している。同様な状況が貝塚北西部にあつたとすると、貝層が捉えられなかった部分には遺構が密に存在することになる。もう1つの考えとして、時期の違いが貝層が垂直に堆積しているのではないかということである。加曾利B式期に形成された面状貝層は9割9分ヤマトシジミが占めていることは先述したが、道路際に散布している貝殻にはハイガイ、カキ等鹹水産の貝がかなり目につく。1988年の道路工事の際の調査では、斜面とはいえ堀之内式期の貝層がかなり下の方から見つかっていることをあわせて考えると、台地上においても加曾利B式期の面状貝層の下に鹹水産の貝を主体とするもっと時期の古い貝層が存在する可能性が強いといえる。ただし、内側にはトレンチを入れられなかったため、プライマリーな貝層がどの程度の深さから残存しているかについて、結局確定できていない。したがって流れ込みである可能性も完全には否定できない。この部分の貝層の分布に関しては、将来の検討課題であろう。しかし、地形測量図に見られるような大きな馬蹄形を呈するのは加曾利B式期の一時期のみであること、仮にそれより古い時期の貝層があつたとしても、その形態は加曾利

B式期の面状貝層よりかなり違ったものになるであろうということだけはいえる。

2. 遺跡の形成と変遷について

今回の調査では全部で13軒の住居跡が検出された。時期別に分けると中期（加曽利E式期）が6軒、後期堀之内式期が2軒、加曽利B式期が2軒、晩期安行式期が3軒である。このうち加曽利E式期をのぞく7軒の住居跡についてはサブトレンチでの調査のみ行った。したがって住居跡の全体規模や構造などについては把握できなかった。極めて限られた情報しか得られなかったわけだが、そのなかでいくつか考察してみたい。

東金野井貝塚は、すでに前期より人間の活動の痕跡が残されているが、居住の痕跡が認められるのは中期になってからである。今回設定した2T、3Tからは従来発見されていなかった中期の住居跡が多数検出され、この時期この地において縄文人が盛んに活動していたことが明らかになった。また、住居跡だけではなく遺物も北側の包含層で多量に出土しており、ごく一部の調査ではあるが中期の活動の中心が北側にあることは間違いない。ただし、この時期の貝層は前回に引き続き今回も見つけることはできず、その生業活動についてはまだ分からない部分が多い。

この貝塚において貝層が本格的に形成されるのは後期になってからであると従来から言われ、今回の調査もそれをおおむね裏付ける結果になっているものの、その生活の様相については不明な点が多い。今回堀之内式期に属すると思われる住居跡を2Tと8Tで検出したが、これらがそれぞれどのような関係にあるのか、どのような集落構成をしていたかを推測する材料はあまりに少ない。面状貝層が形成された加曽利B式期の住居跡は少なからずその貝層におおわれているものと思われるが、2Tで検出された床面直上まで貝層ブロックが堆積している例は、集落の変遷と貝層の形成過程およびそれらの相互関係を知る上で、一定の手がかりを与えてくれるものと思われる。

縄文晩期においても東金野井貝塚は引き続き縄文人の活動拠点となっていたことが、多量に発見される遺物といくつか見られる居住痕跡からうかがえる。前回の調査でも面状貝層の内側に設定された第3地点からは、晩期前半と思われる堅穴状の遺構が検出されているが、今回も7T、8Tから、やはり貝層の内側にあたる地点より晩期初頭の堅穴住居跡が検出された。また、貝層の外側ではあるものの4Tからは多量の遺物が出土している。反面、北側の2T、3Tでは居住痕跡も見られず、遺物量も比較的少ない。これらのことから、縄文時代晩期の東金野井貝塚では、居住域はすでに形成が終わっているとみられる面状貝層の内側に広がっており、活動域も遺跡の南半分にかたよっているとみなしてよい。なお、前回の調査では晩期前半の堅穴状遺構からはブロック状の貝層が検出されたと報告されており、この時期にいたってもなお小規模な貝層の形成があった可能性もある。

以上、簡単に遺跡の変遷について考察してみたが、東金野井貝塚においては各時期によってその生活活動はかなり複雑な様相をもっていることが推測される。一見馬蹄形に見える面状貝層の形状をもって集落形態をも規定する考え方には、慎重な立場をとらざるを得ない。長く営まれた東金野井貝塚の集落構造を解明するには、さらなる資料の増加と地道な分析が必要とされる。

3. おわりに

限られた時間と面積による調査と整理であったが、今回の調査の目的であった今後の保護活用のための基礎資料を提起できたと考える。ページ数の都合で十分検討できなかったいろいろな問題については、今後さらに検討を加えて機会を改めて報告したいと思う。極めて遺存状況のよい東金野井貝塚の価値を生かすためにも、長期展望に立った保護、活用策が望まれる。

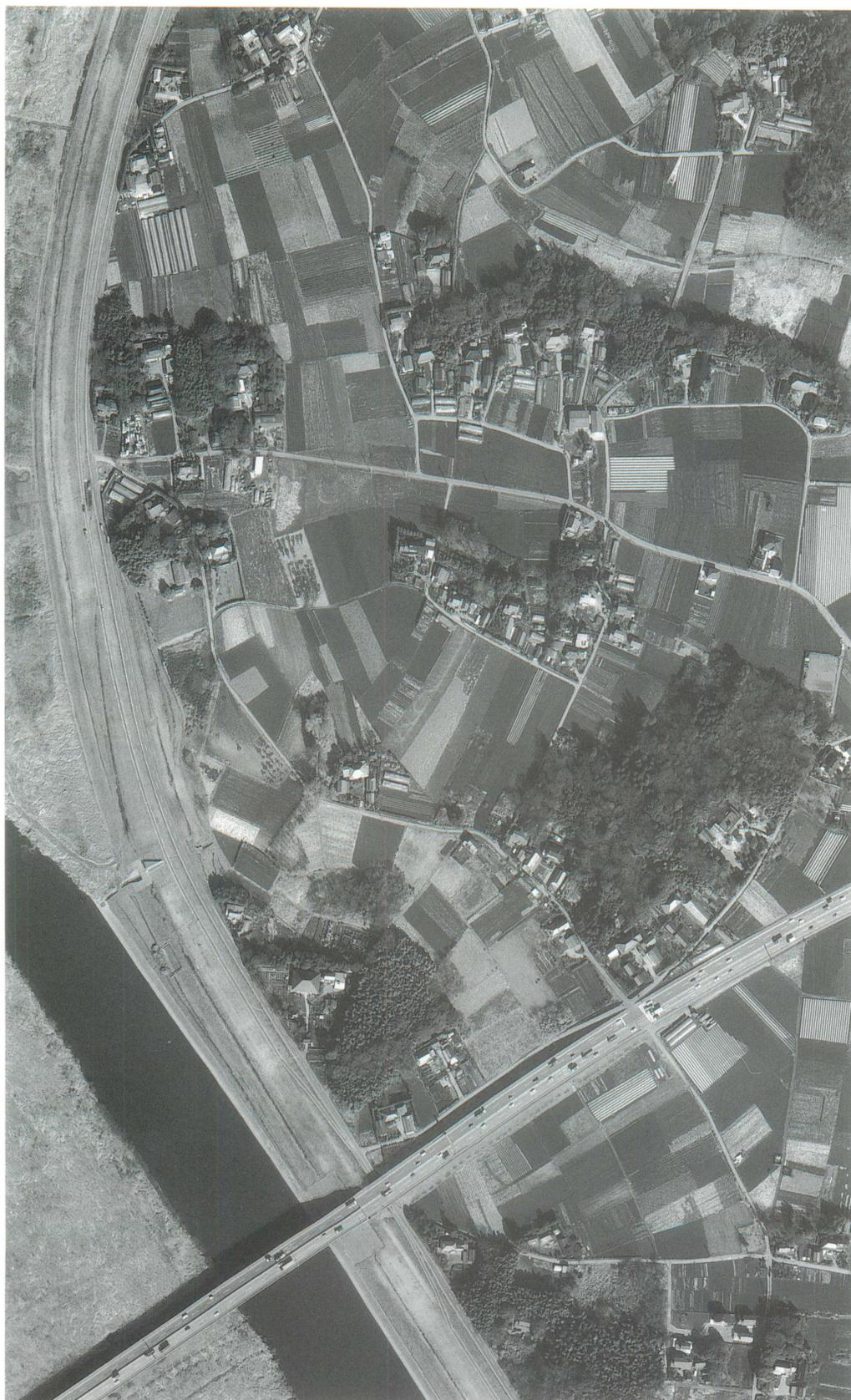
参考文献

- 石橋 宏克他 『銚子市余山貝塚』 千葉県文化財センター 1991年
市立市川考古博物館 『堀之内貝塚資料図譜』 1992年
太田 文雄 『余山貝塚確認調査報告書』 千葉県文化財センター 1989年
金山 嘉昭他 『千葉県野田市 槇の内遺跡 -第Ⅱ次発掘調査-』 1987年
上守 秀明 『袖ヶ浦市山野貝塚確認調査報告書』 千葉県文化財センター 1993年
甲野 勇 『下総国東金野井貝塚出土注口土器』 史前学雑誌3-5 1931年
古代文化学会 『東金野井貝塚発掘行』 古代文化12-12 1941年
埼玉県教育委員会 『埼玉県埋蔵文化財地名表』 1975年
埼玉考古学会 『シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化 発表要旨』 1992年
埼玉考古学会 『埼玉考古 別冊4 シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化』 1992年
薮 淳一 『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』 千葉県文化財センター 1990年
千葉県教育委員会 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) -東葛飾・印旛地区-』 1985年
千葉県文化財センター 『房総考古学ライブラリー2 縄文時代(1)』 1986年
千葉県文化財センター 『房総考古学ライブラリー3 縄文時代(2)』 1987年
出口 雅人 『千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書』 千葉県文化財センター 1991年
直良 信夫 『東金野井貝塚発掘の自然遺物』 古代文化13-1 1942年
野田市郷土博物館 『東金野井貝塚 -限界確認調査概報-』 野田市教育委員会 1981年
野田市教育委員会 『大崎貝塚・東金野井貝塚 立ち会い発掘調査報告書』 1988年
野田市教育委員会 『野田市の遺跡 -野田市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書-』 1980年
八幡 一郎他 『貝の花貝塚』 松戸市教育委員会 1973年
四柳 隆 『小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書』 千葉県文化財センター 1992年

写真図版



第28図 東金野井貝塚の周辺地形



東金野井貝塚周辺の航空写真（昭和62年撮影）縮尺約1：5,000



1. 遺跡近景（北西から）



2. 遺跡近景（南西から）



a. 貝塚碑



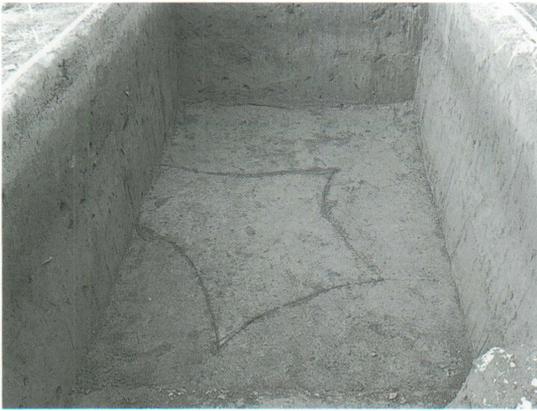
b. 調査風景



c. 1T西から



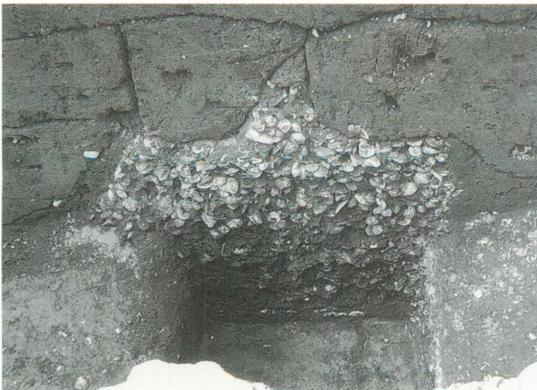
d. 2T北から



e. 住居跡群検出状況



f. 2T土層セクション



g. 2T貝サンプリング部分 西側セクション



h. 2T貝サンプリング部分 北側セクション



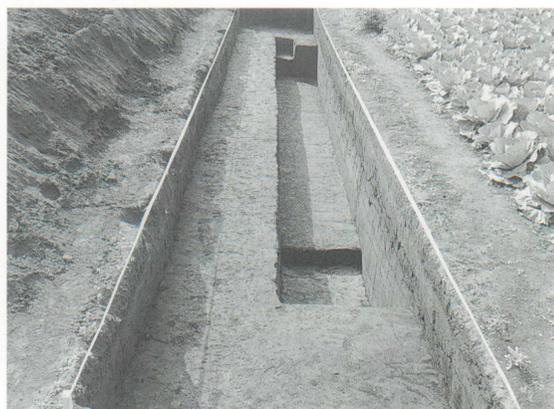
a. 2T-001土器出土状況



b. 3T 東から



c. 3T-001土器出土状況



d. 4T 東から



e. 4T 土層セクション



f. 5T 北から



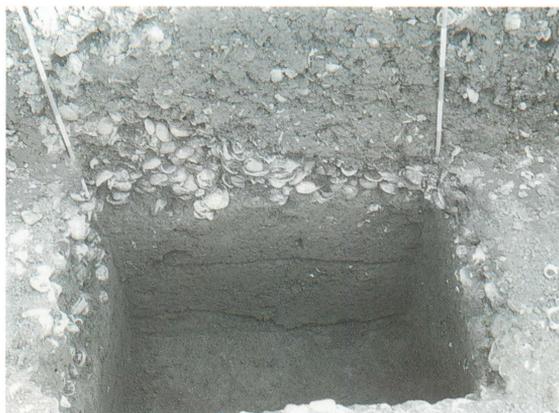
g. 6T 南から



h. 6T 調査風景



a. 7T



b. 7T貝サンプリング部分セクション



c. 8T北から



d. 8T南から



e. 8T-001土器出土状況



f. 8T-002検出状況



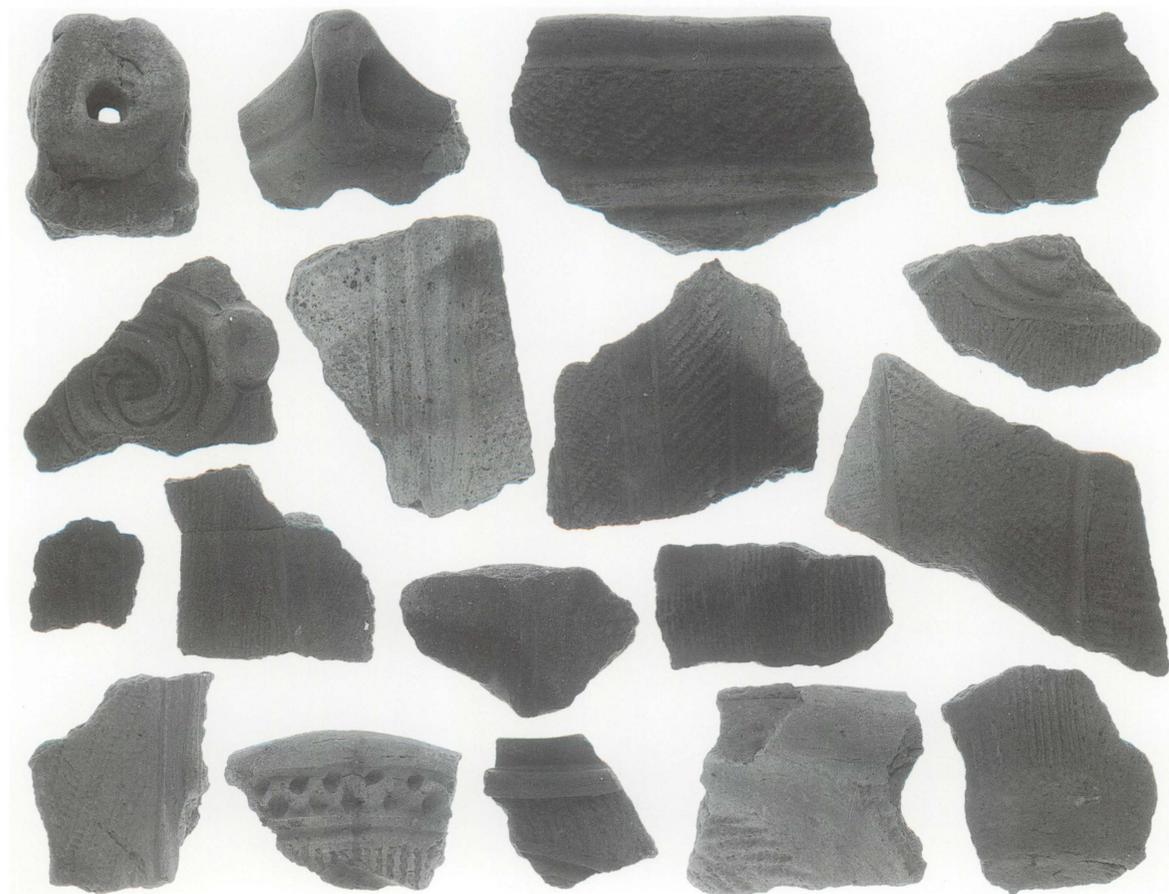
g. 8T貝サンプリング部分 南側セクション



h. 8T貝サンプリング部分 西側セクション



出土土器 (第9图)



出土土器 (第10图)



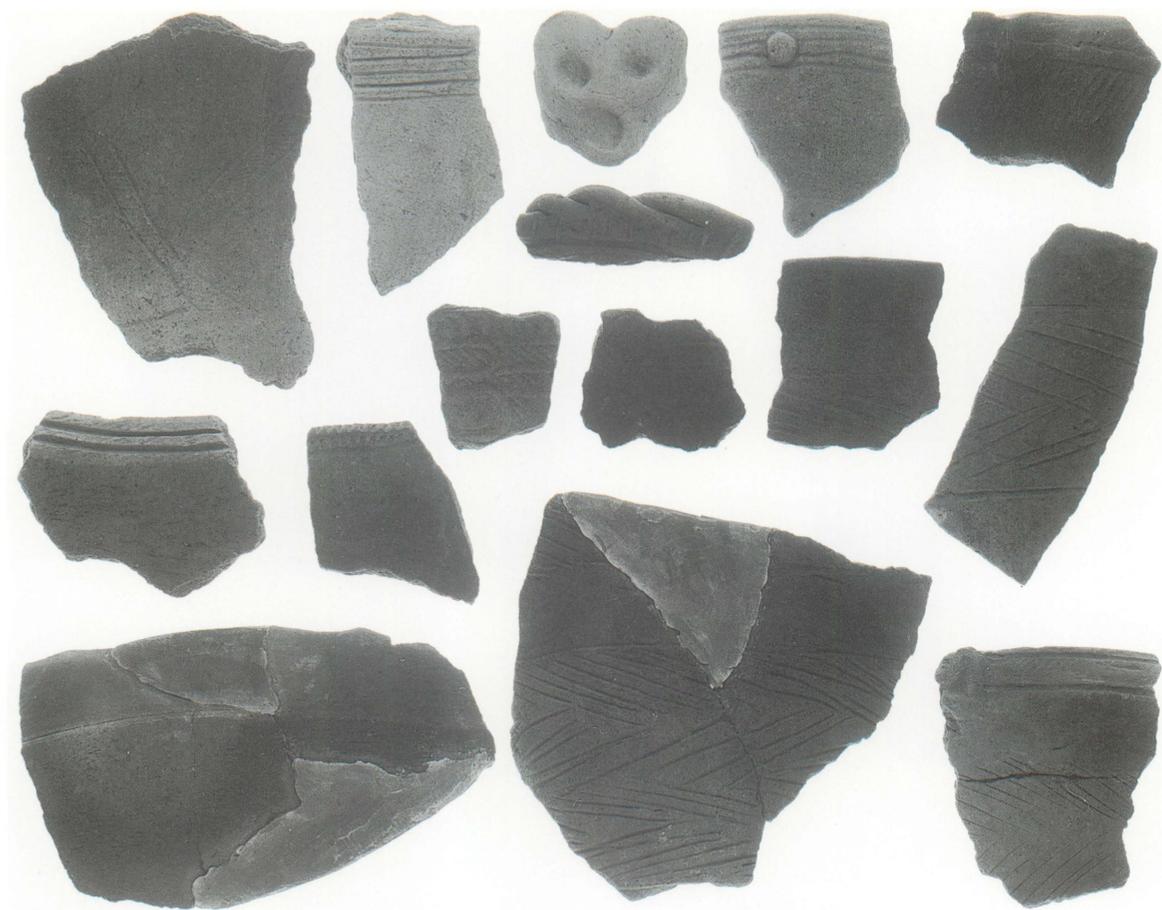
出土土器 (第11图)



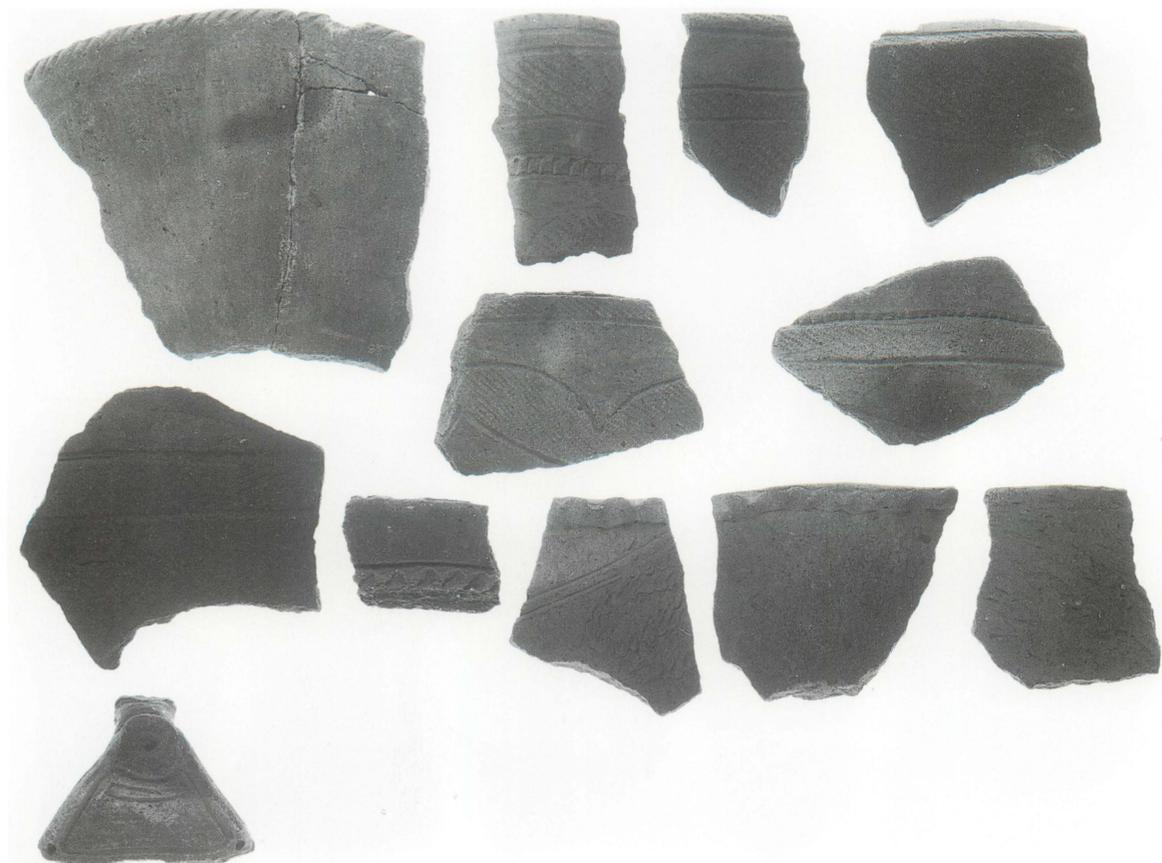
出土土器 (第8图)



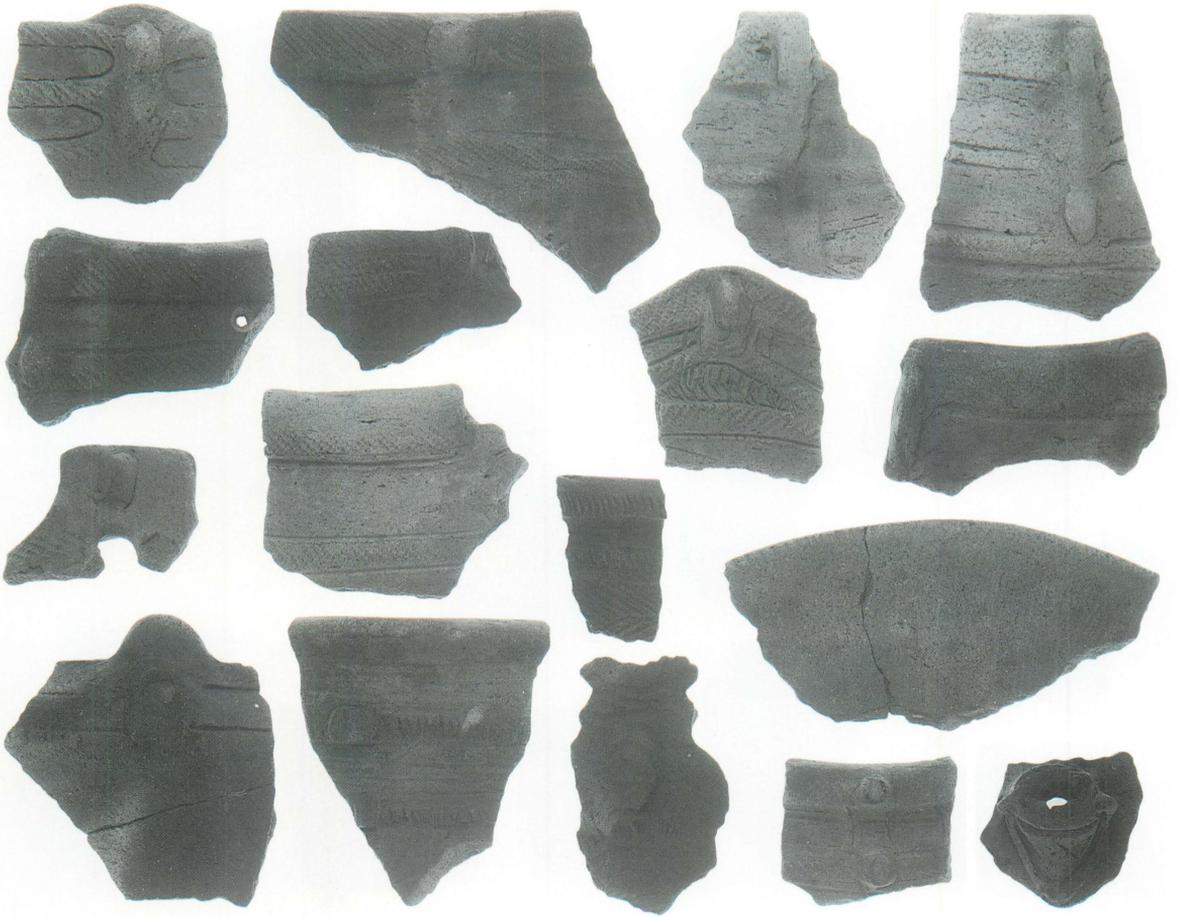
出土土器 (第12图)



出土土器 (第13图)



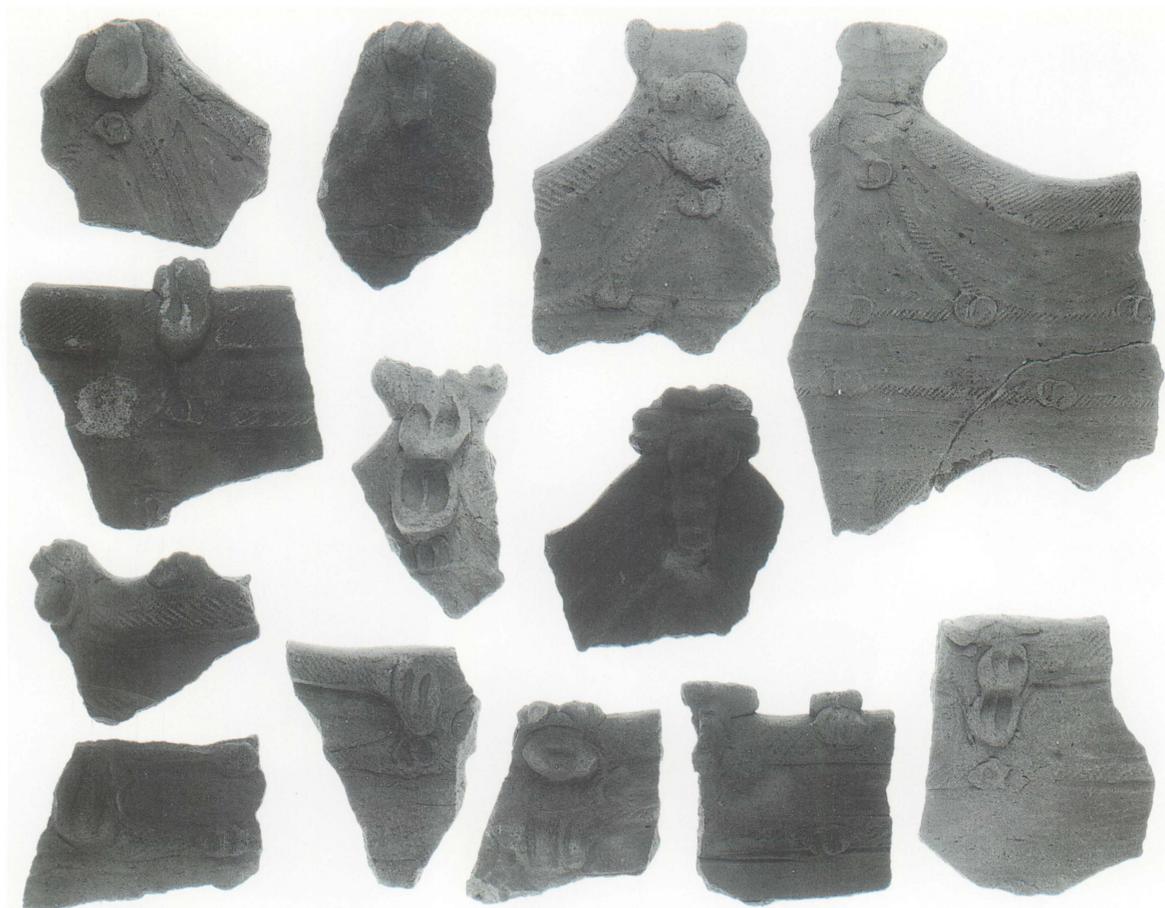
出土土器 (第14图)



出土土器 (第15图)



出土土器 (第16图)



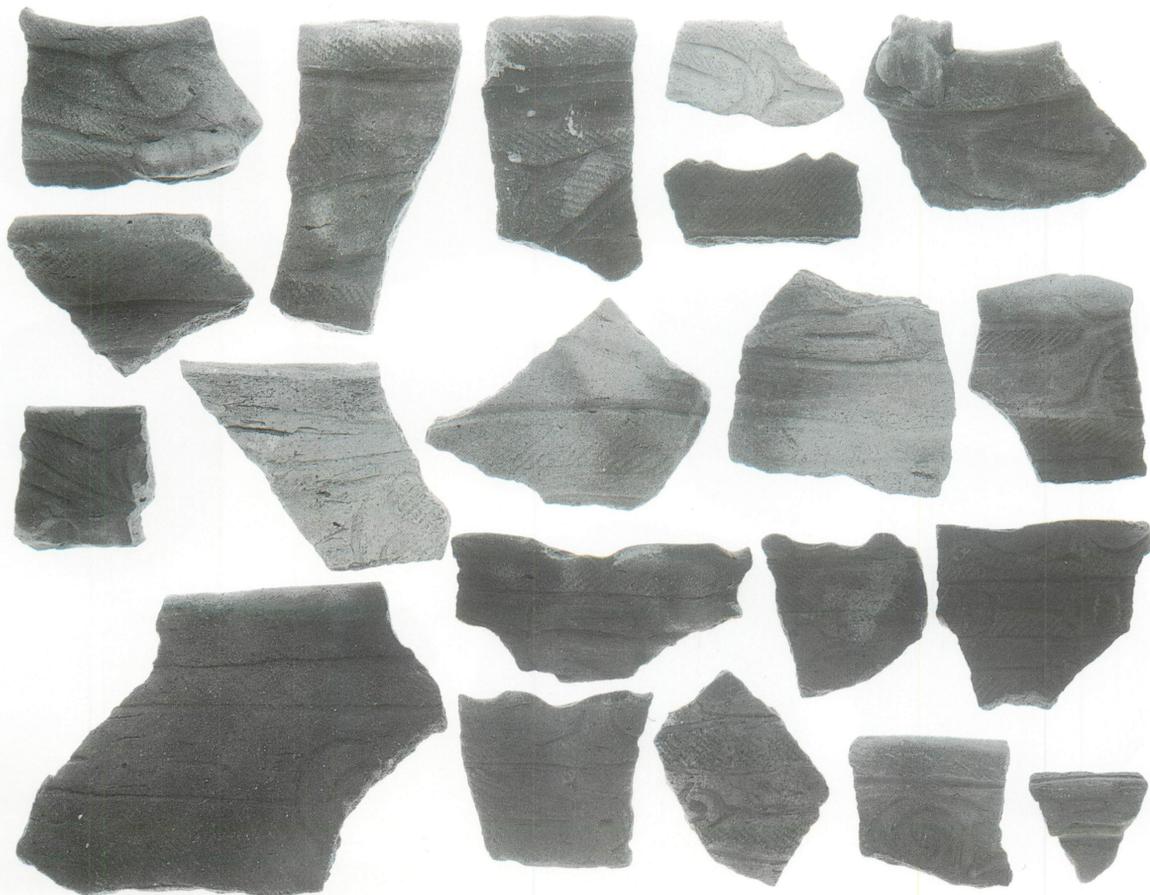
出土土器 (第17图)



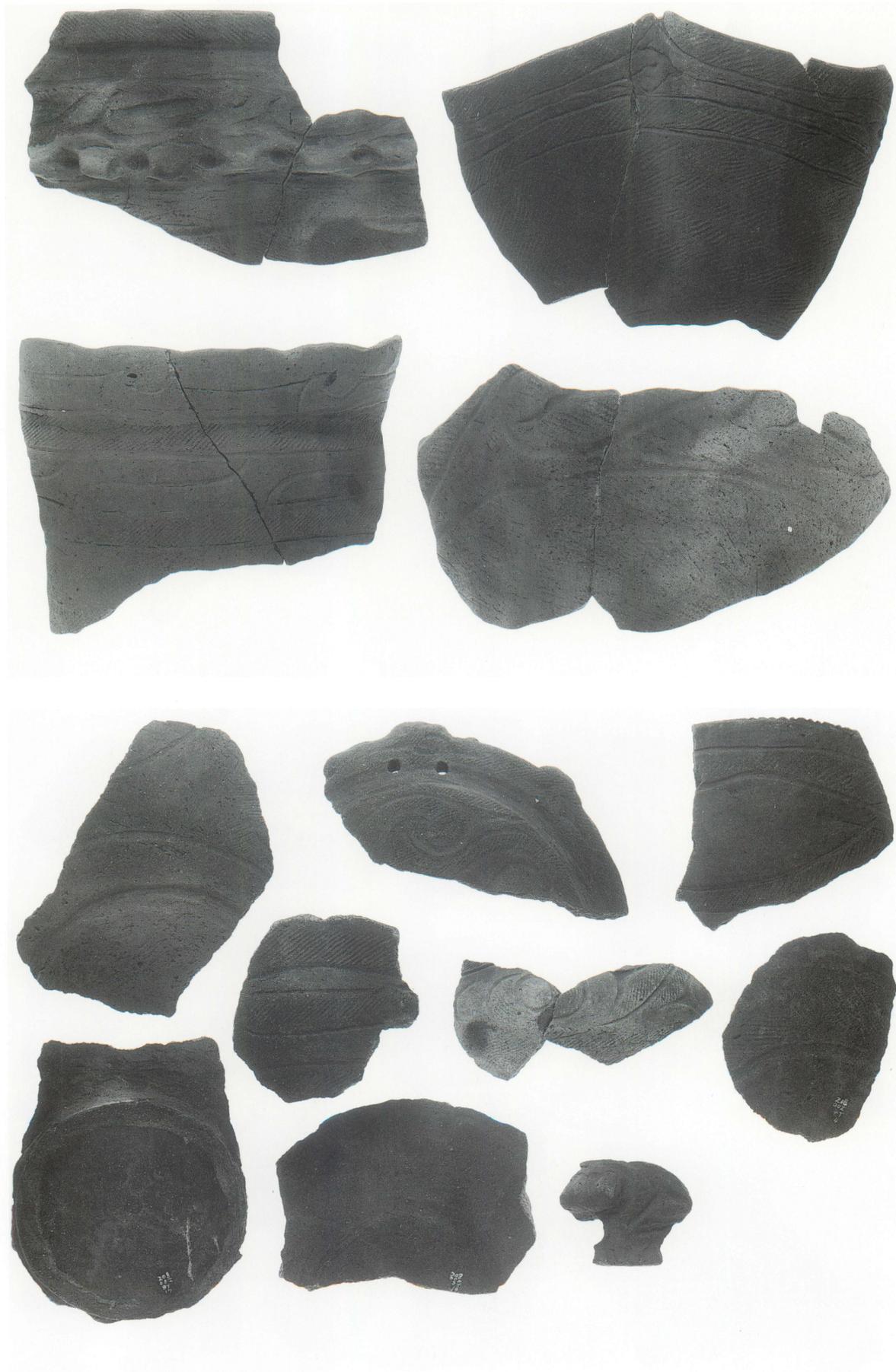
出土土器 (第18图)



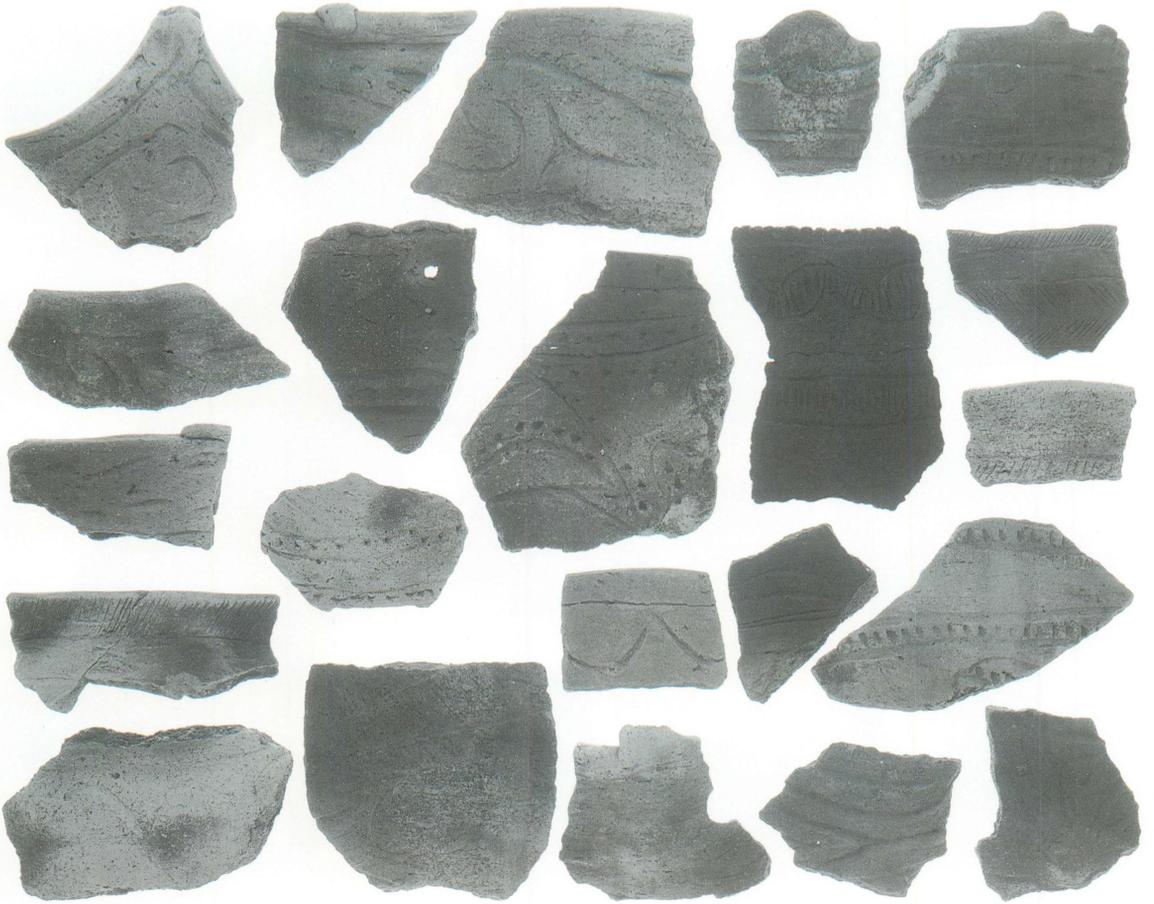
出土土器 (第18图)



出土土器 (第19图)



出土土器 (第19・20图)



出土土器 (第21图)



出土土器 (第22图)



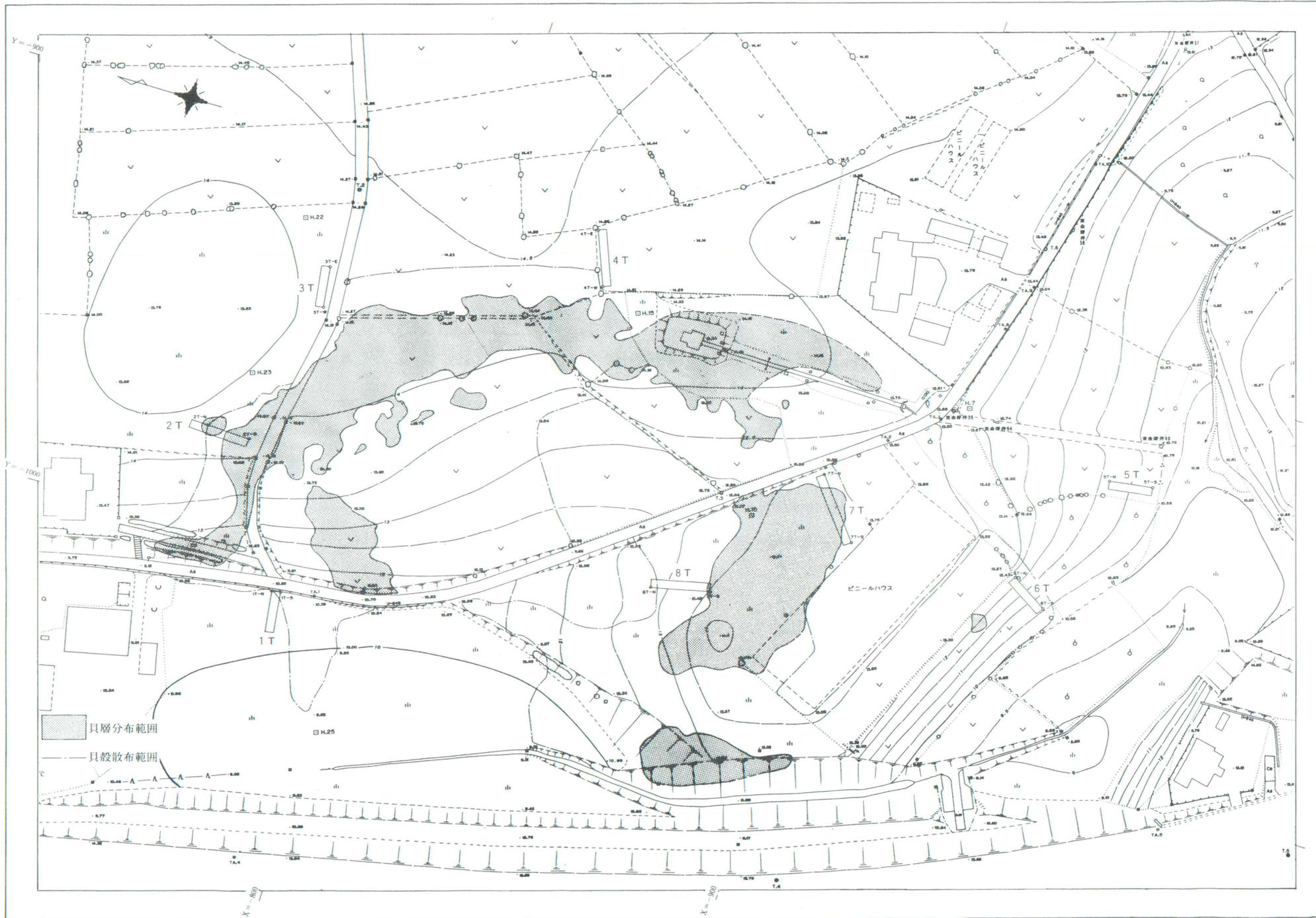
出土土器 (第23・24图)



出土土製品・骨角器 (第25图)



東金野井貝塚地形測量図



貝層分布範囲
 貝殻散布範囲

抄 録

ふりがな	のだしひがしかなのいかいづかはっくつちょうさほうこくしょ		
書名	野田市東金野井貝塚発掘調査報告書		
副書名			
巻次			
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告		
シリーズ番号	第258集		
編著者名	安井 健一		
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター	TEL 043 (422) 8811	
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地 2		
発行年月日	1994年 3月 31日		

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のだしひがしかなのいかいづかの 東金野井貝塚	のだしひがしかなの 野田市東金野井	市町村	遺跡番号	35度	139度	1993.10.01～	200m ²	国庫補助 事業による 学術調査
		12208	002	59分 35秒	49分 22秒	1993.10.27		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東金野井 貝塚	貝塚 集落	縄文	貝層 住居跡 13軒以上 土坑 7基以上 遺物包含層	黒浜～安行3d式土器 土偶・土版などの土製品 打製石斧などの石器類 骨角器	馬蹄形の面状貝層の規模を把握 各時期ごとの居住域を確認 良好な遺物包含層の存在を確認

千葉県文化財センター調査報告 第258集
野田市東金野井貝塚発掘調査報告書

平成6年3月31日発行

発行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

印刷 有限会社 ミリオン印刷
千葉市中央区南町3丁目4番2号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。